

*Tattvasamgraha* および *Tattvasamgrahapañjikā*  
第 21 章「三時の考察 (Traikālyaparīkṣā)」  
校訂テキストと和訳 (kk. 1785–1808)

志賀 浄邦

I. はじめに

本稿の目的は、シャーンタラクシタ (ca. 725–788) による *Tattvasamgraha* (以下 TS と略) とカマラシーラ (ca. 740–795) による注釈 *Tattvasamgrahapañjikā* (以下 TSP と略) 第 21 章「三時の考察 (Traikālyaparīkṣā)」のテキスト前半部 (kk. 1785–1808) を批判的に校訂し、注解を伴う新たな翻訳を提示することである<sup>(1)</sup>。

まず、TS および TSP 同章の研究史を概観しておきたい。1938 年に Stanislaw Schayer 氏によって英訳 (=Schayer[1938]) が、また 1964 年には、菅沼晃氏によって和訳 (=菅沼 [1964]) が発表された。ただしこの段階では Swami Dwarikadas Shastri 氏による刊本 (=S) は未だ出版されていないため、両者が参照したのは Embar Krishnamacharya 氏による刊本 (=K) のみということになる。その後 1974 年に佐々木現順氏による和訳 (=佐々木 [1974]) が、また 1979 年には太田心海氏によって TS 部分のみの和訳 (=太田 [1979]) が発表された<sup>(2)</sup>。

しかしながらこれらの研究には、(1) ジャイサルメール写本 (=J)<sup>(3)</sup> を参照していないこと、

---

<sup>(1)</sup> 本研究は、科学研究費・基盤 (A) 「インド哲学諸派の〈存在〉をめぐる議論の解明 (課題番号: 23242004)」 (通称: ダルシャナ科研) による共同研究プロジェクトの一環として、2013 年 3 月、2014 年 3 月、2014 年 8 月の三回に渡って龍谷大学において開催された集中研究会の成果の一部である。研究会を主催して下さった桂紹隆氏 (龍谷大学) をはじめ、研究会に参加していただいた方全員にこの場を借りて心より御礼申し上げたい。特に、秋本勝氏 (京都女子大学)、片岡啓氏 (九州大学)、護山真也氏 (信州大学)、藤井隆道氏 (京都女子大学)、酒井真道氏 (関西大学) の各氏からは、集中研究会の際に多くの有益なご意見をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

<sup>(2)</sup> その他、TS/TSP 「三時の考察」章を直接的・間接的に扱った論文等の中で同テキストの部分的な訳がなされている場合があるが、それらについては該当する箇所付した訳注の中で言及することとしたい。

<sup>(3)</sup> TS および TSP のジャイサルメール写本およびパターン写本 (=Pā) については、松岡寛子氏より、鮮明に撮影

(2)他の著作、特にヴァスバンドウによる *Abhidharmakośabhāṣya* (以下 *AKBh* と略) とスティラマティ (ca. 510–570) によるその注釈書 *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma* (以下 *AKBhT* と略) に見られる平行・関連箇所の網羅的な指摘や、それらとの字句レベルでの厳密な比較・対照が行われていないこと、(3)アビダルマおよび仏教論理学・認識論に関する近年の研究成果が十分に反映されていないこと、などの問題があるため、テキスト校訂を含むこれまでの研究を見直し、全面的に補足・修正する必要がある。またこれは *TS* および *TSP* 全体に言えることでもあるが、二つの校訂本 (*K*, *S*) が採用する読みの問題がないわけではない。本稿では、*AKBh* 等他の著作に見られる平行・関連箇所との比較・対照を容易にするため、また従来の読み (*K*, *S*, Schayer[1938], 菅沼 [1964]) と主に *J* 写本にもとづく批判的校訂によって得られた読みの異同状況を示すために、和訳に加え校訂テキストも提示することとする。

*TS* および *TSP* 「三時の考察」章中、今回訳出する箇所 (kk. 1785–1808) は、シノプシスにも示した通り、主に説一切有部の四大論師によって主張された「三世実有論」(*TSP ad TS* 1785–1786) とその 6 つの論拠 (*TS* 1787–1789), また同理論を支える作用 (*kāritra*) 説 (*TS* 1790–1792) とそれに対する経量部の立場からの批判 (*TS* 1793–1808) などの内容から構成されている。*AKBh* には登場することのない説一切有部の論師サンガバドラ (衆賢, 5 世紀頃<sup>(4)</sup>) の見解が大きく取り上げられ、やはり経量部の立場から批判が加えられるのも、*TS/TSP* 「三時の考察」章の特徴の一つである。

本章における主な批判対象であるこの三世実有論とは、「ある存在要素 (*dharma*) の本性あるいは本体 (*svabhāva*, *dravya*)<sup>(5)</sup> は、その存在要素の状態や性質が変化するとしても、過去・現在・未来の三世 (*adhvan*) にわたって実在する」という理論であるが、説一切有部によると、三世は作用の有無によって区分されると考えられた。すなわち、「作用 [があるとき] に存在するものが、<現在のもの> と呼ばれる。作用を失ったものは<過去のもの> [と呼ばれ]、それ (=作用) を [未だ] 獲得していないものが<未来のもの> [と呼ばれる]<sup>(6)</sup>」ということである。同理論は、歴史的には『阿毘達磨識身足論』(Taisho 1539, vol. 26, 前 2 世紀頃) や『阿毘達磨大毘婆沙論』(Taisho 1545, vol. 27, 2–3 世紀頃) 等にも遡る古い説であり、*AKBh* や *Abhidharmadīpavibhāṣāprabhāvṛtti* (以下 *ADV* と略) 等にも伝承された。

ヴァスバンドウ (ca. 400–480<sup>(7)</sup>) は、*AKBh* 第 5 章「随眠品 (*Anuśayanirdeśa*)」において説一

された画像データを提供いただいた。ここに記して心より感謝の意を表したい。

(4) サンガバドラの年代については、Frauwallner[1973: 97f.]を参照のこと。

(5) 三世実有論の文脈で現れる *svabhāva* という用語の訳語としては、「本質」「固有の性質」「それ自身の性質」「自性」「本体」「自体」等様々なものが考えられるが、本稿では Cox[1995: 139] による訳 (*intrinsic nature*, 本来的な性質/固有の性質) および解説に従い、原則として「本性」という訳語を採用することとする。ただし、論者の立場や文脈に応じて訳語を変えている場合もある。

(6) *TS* 1790cd–1791: *kāritreṇa vibhāgo 'yam adhvanāṃ yat prakalpyate //*

*kāritre vartate yo hi vartamānaḥ sa ucyate /*

*kāritrāt pracuto 'tītas tadaprāptas tv anāgataḥ //* (Cf. *AKBh* 297,11–13.)

(7) ヴァスバンドウ、スティラマティ、シャーンタラクシタ、カマラシーラの年代は、Frauwallner[1961]に従った。

切有部の四大論師による三世実有論とその論拠を紹介し、それらに対し経量部の立場から批判を加えている。TS および TSP において前提とされているのはこの AKBh 等に見られる議論であり、TSP と AKBh の間には多くの平行・関連箇所が存在する。それでは、そもそも AKBh 第 5 章「随眠品」において、三世実有論はどのような文脈で登場するのであろうか。AKBh には以下のような記述がある。

一方、この過去のものや未来のものは、実体として存在するのか、あるいはしないのか。もし [実体として] 存在するなら、諸々の因果的存在は全ての時において存在する [ことになる] ため、恒常であるということになる。あるいはもし [実体として] 存在しないなら、いかにして [人は]、それ (= 過去・未来の随眠 [anuśaya]) によって<sup>(8)</sup> それ (= 過去・未来のもの) に繋ぎとめられたり、[そのようなものから] 離れたりするのか。<sup>(9)</sup>

この問いは同書の直前の議論 (AKBh 294,4–295,5) を受けたものであるが、そこでは、ある人がある対象に対して煩惱を起こす場合、過去・現在・未来の煩惱はそれぞれ三世のうちいずれの時に属する対象と結びついているのか<sup>(10)</sup>、といった問題が論じられている。例えば、過去のある時点で起こったある人の煩惱 (例えば貪・瞋・慢) が断たれることのないまま現在も継続している場合、その人はその煩惱によって過去および現在の事物 (= 対象) に繋ぎとめられることになる<sup>(11)</sup>。また未来時に生起する煩惱は、その種類に応じて、未来の事物のみを対象とする場合や三世全ての事物を対象とする場合があるという<sup>(12)</sup>。その場合、その人は未来の煩惱によって、未来時あるいは三世いずれかの事物に繋ぎとめられることになる。さらに、三世において起こる見・疑・無明といった煩惱は一般的な事柄を対象とするもの (sāmānyakleśa) であ

<sup>(8)</sup> 秋本・本庄 [1978: 86], 小谷・本庄 [2007: 111] のいずれも、ここでの tena を「その過去・未来の随眠と [結びつき/繋がれたり]」の意味で解しているが、AKVy に見られる、認識対象 (所縁)・随眠・人の三者の関係を例えた比喩表現: 「[人は] その事物に対して、それら貪り等 [の煩惱] によって繋ぎとめられている。あたかも牡牛が綱で柱に [繋ぎとめられている] ように (AKVy 467,21f: *tasmin vastuni tai rāgādibhiḥ saṃyuktaḥ*, *dāmeva balivardaḥ klīlake*.)」また AKBh 当該箇所のチベット訳 (D239a3: *de dang dam / des ldan pa ...*) より、「過去・未来の随眠によって」と理解した。

<sup>(9)</sup> AKBh 295,2–4: *kiṃ punar idam atīnāgataṃ dravyato 'sty atha na. yady asti, sarvakālāstitvāt saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaṃ prāpnoti. atha nāsti, kathaṃ tatra tena vā saṃyukto bhavati viśaṃyukto vā.*  
この箇所の訳については、秋本・本庄 [1978: 86], 小谷・本庄 [2007: 111] も参照のこと。なお、この問いに対する経量部 (ヴァスバンドウ) の立場からの応答は、AKBh 301,8–10 に現れる。秋本・本庄 [1978: 95] も参照のこと。

<sup>(10)</sup> AKBh 294,4: *yasya pudgalasya yo 'nuśayo yasminn ālambane 'nuśete, sa tena tasmin samprayuktaḥ. idaṃ tu vaktavyam: atītena kasmin yāvat pratyutpannena kasminn iti.*  
「ある人のある随眠が、ある認識対象に対して執着 (随増) する場合、その [人] はその [随眠] によって、その [認識対象] に繋ぎとめられている。一方、[その人は] 過去の [随眠] によって [三世のうち] いずれ [の時に属する認識対象] に [繋ぎとめられるのか]、乃至、現在の [随眠] によってどの [認識対象] に [繋ぎとめられるのか]、ということが述べられるべきである。」(小谷・本庄 [2007: 106] も参照のこと)

<sup>(11)</sup> AKBh 294,8–11 ad AK 5.23 および小谷・本庄 [2007: 106] 参照。

<sup>(12)</sup> AKBh 294,12–17 ad AK 4.24ab および小谷・本庄 [2007: 106f.] 参照。

るため、それらの煩悩をもつ者は三世全ての事物に繋ぎとめられるという<sup>(13)</sup>。それ故、過去あるいは未来時に起こる煩悩が三世いずれかに属する事物を対象としている以上、煩悩の対象となる過去時あるいは未来時の事物もまた現時のものと同様に実在するはずである。AKBhにおいて説一切有部によって主張される三世実有論は、以上のような考え方が出発点となっているといえる<sup>(14)</sup>。

一方 TS および TSP では、AKBh においてなされている煩悩とその対象に関する議論は詳説されていない。TSP 「三時の考察」章は「『[事物が過去・現在・未来を通じてその本性を保ったまま] 移り行くということはない (asaṃkrānti)』という [TS 6a の<縁起>という語に対する限定要素] の妥当性を証明するために、[シャーンタラクシタは]『金が』云々と述べる」という一節から開始されるが、この asaṃkrānti という用語は、訳注にも示した通り TS 4 (TS 序章) の中に見られる<sup>(15)</sup>。TS 序章の一連の偈の文言は仏教の中心的教理である「縁起 (pratītyasamutpāda)」を修飾する形で現れるが、その縁起の修飾語 (限定要素) が TS/TSP 各章の主題あるいはキーワードとなっている。つまり TS および TSP において三世実有論は、asaṃkrānti とはちょうど反対の、「[事物が三世にわたってその本性を保ったまま] 移り行く (saṃkrānti)」という理論であると見なされ<sup>(16)</sup>、縁起説に反するドグマとして批判されるということになる。なお「三時の考察」章冒頭の偈である TS 1785 とそれに対する TSP の記述から、三世実有論がジャイナ教徒あるいはミーマーンサー学派による存在論と類似したものであると考える者がいたことも窺い知ることができる<sup>(17)</sup>。

TS/TSP 「三時の考察」章が、AKBh 「随眠品」に見られる三世実有論とそれに対する経量部 (ヴァスバンドゥ) の立場からの批判を前提として書かれていることは上述の通りであるが、そのため、AKBh の諸注釈書と TS および TSP の関係についても考慮しておく必要がある。結論を先取りするなら、江島 [1986: 14] も夙に指摘している通り、少なくともカマラシーラはスティラマティによる AKBhT を参照・利用することにより TS (特に AKBh との平行・関連箇所) を注釈しようとした可能性が高い。TS と AKBhT の関係については明確なことは言えないものの、カマラシーラが AKBhT を参照・利用していたとすれば、シャーンタラクシタが同書を知っていた可能性も十分考えられる。さらに TS/TSP 「三時の考察」章のテキスト校訂と翻訳の作業を通して、AKBh の諸注釈書 (AKBhT, AKVy), 『阿毘達磨順正理論』, ADV, TS/TSP 等のテキスト間の関係を探ることも本稿の目的の一つとしたい。

<sup>(13)</sup> AKBh 294,20–295,2 ad AK 5,24cd および小谷・本庄 [2007: 107] 参照。

<sup>(14)</sup> 秋本・本庄 [1978: 84–86] も参照のこと。

<sup>(15)</sup> TS 4: asaṃkrāntim anādyantaṃ pratibimbādisaṃnibham / sarvaprapañcasamdhonirmuktam agataṃ paraiḥ //

<sup>(16)</sup> TSP 17,14 では、sarvāstivāda が saṃkrāntivādin と言い換えられている。Schayer [1938: 29, n.1] も参照のこと。

<sup>(17)</sup> 詳細については、志賀 [2015: 166–170] を参照のこと。

## II. 翻訳にあたって

## (a) 和訳・訳注の中で使用する一般的記号・略号

[...]	訳・解釈を補足する際に使用
(...)	言い換えや対応する原語を表示する際に使用
<... >	術語の明示や特定の語句の強調の際に使用
<u>下線</u>	校訂テキスト中に現れる人物名, 学派名, 著作名・章名等に付す。
add.	added in
<b>Ce</b>	<i>citatum ex alio</i> (別のテキストからの明示的引用。 <b>Ce</b> を含む引用関係を示す記号: <b>Ce'</b> , <b>Ce'e</b> , <b>Re</b> の詳細な説明については, Steinkellner et al.[2005: lii–liv] を参照のこと)
<b>Ce'</b>	<i>citatum ex alio usus secundarī</i> (二次的に使用される, 別のテキストからの引用)
<b>Ce'e</b>	<i>citatum ex alio usus secundarī modo edendi</i> (差異を伴って二次的に使用される, 別のテキストからの引用)
cf.	confer
D	チベット大蔵経 sDe dge 版
em.	emended
J	TS および TSP の Jaisalmer 写本 (本写本についての詳細は, 塚本他 [1990: 450f.], Funayama[1992: 51, n.26] を参照のこと)
k.	kārikā
K	E. Krishnamacharya による TS および TSP の校訂本
n.e.	no equivalent in
om.	omitted in
P	チベット大蔵経北京版
Pā	TS および TSP の Pāṭaṇa(Pattan) 写本 (本写本についての詳細は, 塚本他 [1990: 450f.] を参照のこと)
<b>Re</b>	<i>relatum ex alio</i> (先行する別のテキストから伝えられた内容)
S	S. D. Shastri 氏による TS および TSP の校訂本
Schayer	Schayer[1938] における Schayer 氏の読み
Suganuma	菅沼 [1964] における菅沼氏の読み

Skt.	Sanskrit
T	チベット語訳
Taisho	大正新脩大藏経

## (b) テキスト校訂および訳出の際の基本方針

- 太字は、TS 本文と TSP 中の *pratīka* を示す。
- TS の偈番号と本文・脚注において TSP を言及する際のページ数・行数の表示は、便宜上 S に従う。<sup>(18)</sup>
- テキスト校訂・訳出順序については、原則として TS の偈の間に対応する TSP を挿入する形、すなわち K および Schayer[1938] のスタイルに従うが、必要に応じて修正を施す。
- Schayer 氏の採用する読みあるいは解釈との異同がある場合、脚注においてそれを示す。<sup>(19)</sup>

## (c) 今回訳出する箇所各資料の位置

- TS 1785–1808
  - (Skt.) J90b3–91b5; Pā33a14–b11; K503,21–510,6 (kk. 1786–1809); S613,7–621,7 (kk. 1785–1808)
  - (Tib.) D4266, vol. 18, ze 65a7–66a5; P5764, vol. 138, 'e 79a3–80a2
- TSP ad TS 1785–1808
  - (Skt.) J191b6–194a2; Pā146b12–148b12; K503,20–510,14; S613,20–622,14
  - (Tib.) D4267, vol. 19, 'e 80b1–85a3; P5765, vol. 139, ye 115a5–120a4

## (d) TS/TSP 第 21 章「三時の考察」(kk. 1785–1808) シノプシス

### 1. 三世実有論とその論拠 (TS 1785–1789)

#### 1.1. 総論・他学派説との類似性の指摘 (TS 1785)

<sup>(18)</sup> K と S で偈の通し番号が異なるのは、TS 526 をカウントしているかどうか起因している。K は、写本には存在しない TS 526 を TSP によって本来は存在していたと仮定し、TS 526 を通し番号としてカウントする。一方、新たな写本を確認した S は、これを誤りと考え通し番号としてはカウントしない。なお、K が TS 526 が本来は存在したという根拠とする TSP の “*atha vā bhāva ityādi*” という記述は実際には TS 525c に対応するため、TS 526 が存在したとする根拠としては弱い。また、チベット訳を含め TS 526 に対応すると思われる TSP も存在しないため、現在までのところ S の偈番号の方を正しいと考えるのが妥当である。Steinkellner–Much[1995: 56] も参照のこと。

<sup>(19)</sup> その他、TS および TSP の校訂・翻訳の際の方法論については Funayama[1992: 50–52] も参照のこと。

## 1.2. 四大論師の主張の紹介 (TSP 614,7–615,7 ad TS 1786)

1.2.1. ダルマトラータ説 (bhāvānyathāvādin, 様態のちがいを主張する者)

1.2.2. ゴーシャカ説 (lakṣaṇānyathāvādin, 特徴のちがいを主張する者)

1.2.3. ヴァスミトラ説 (avasthānyathāvādin, 境位のちがいを主張する者)

1.2.4. ブッダデーヴァ説 (anyathānyathikavādin, 関係性によるちがいを主張する者)

## 1.3. 四大論師の各主張に対する総論的批判 (TSP 615,8–23 ad TS 1786)

## 1.4. 三世実有論の 5 つの論拠 (TS 1787–1789)

1.4.1. 理証 (1): 過去・未来の対象から生じる認識の存在にもとづく過去・未来世の存在証明 (TS 1787)

1.4.2. 経証 (1): 「認識は二つもの (=眼と色かたち等) に縁って生起する。」 (TS 1787)

1.4.3. 理証 (2): 過去の業から生じる結果の存在にもとづく過去世の存在証明 (TS 1788)

1.4.4. 理証 (3): ヨーガ行者の認識による過去・未来世の存在証明 (TS 1788)

1.4.5. 経証 (2): 「過去・未来の物質的存在等の全てを集めた後に&lt;色蘊&gt;と名づける。」 (TS 1789)

**2. 説一切有部による作用説とそれに対する批判 (TS 1790–1819)**

2.1. 説一切有部およびサンガバドラによる作用 (kāritra) の定義 (TS 1790–1792)

2.2. 作用と存在要素の関係について: 経量部の立場からの批判 (TS 1793–1800)

2.2.1. 作用が存在要素と異なる場合 (TS 1793–1797)

2.2.2. 作用が存在要素と異なる場合 (TS 1798–1800)

2.3. 作用の第三の可能性に対する批判と作用の作用の否定 (TS 1801–1802)

2.4. 「存在要素の本性は作用によって区別される」という主張とそれに対する批判 (TS 1803–1805)

2.5. 作用と存在要素の本性の関係性についての批判 (TS 1806–1808)

### III. Critical Edition (TS 1785–1808)

(K503,20; S613,20; J191b6; Pā146b12; D80b1; P115a5) **asamkrāntim** (TS 4a') ity asya samarthanārtham āha: **hemetyādi**.

(Pā33a14; D65a7; P79a3)

**hemānugamasāmye-<sup>(20)</sup>na<sup>(20)</sup> trikālānugato<sup>(21)</sup> nanu<sup>(22)</sup> /**

J90b4

**avasthābhedavān bhāvaḥ kaiścid baudhair apīṣyate // (TS 1785)**

**nāvasthānaṃ tu kasyacid** (TS 1782d) ity atredaṃ codyam: nanu katham idam ucyate **nāvasthānaṃ tu kasyacid** (TS 1782d) iti, yā-<sup>\*</sup>vatā **kaiścid** dharmatrātaprabhṛtibhir **baudhair** **api** kālatrayāvasthito<sup>(23)</sup> **bhāva** iṣṭo 'vasthābhedād **dhemānugamasādharma**yeṇa<sup>(24)</sup>. (TSP ad TS 1785)

J192a1

(K503,26; S614,7; Pā146b14; D80b2; P115a7) etad eva dvitīyena ślokena darśayati.

(Pā33a15; D65a7; P79a4)

**avasthābhedabhāve 'pi yathā varṇaṃ<sup>(25)</sup> jahāti na<sup>(26)</sup> /**

**hemādhusu<sup>(27)</sup> tathā bhāvo dravyatvaṃ na tyajaty ayam // (TS 1786)**

tatra bhāvānyathāvādī bhadantadharmatrātaḥ. sa kilāha: dharmasyādhusu vartamānasya bhāvānyathātvaṃ eva kevalam, na tu dravyasyeti. yathā suvarṇadravyasya kaṭakakeyūra-kuṇḍalādy<sup>(28)</sup>-abhīdhananimittasya guṇasyānyathātvaṃ na varṇasya<sup>(29), (a)</sup> tathā dharmasyān-āgatā-<sup>\*</sup>dibhāvād anyathātvaṃ<sup>(30)</sup>. tathā hy anāgatabhāvaparitāyāgena vartamānabhāvaṃ prati-

J192a2

<sup>(20)</sup> hemānugamasāmyena J : hemānugamasāmānye S : hemno 'nugamasāmyena K

<sup>(21)</sup> dus gnyis rjes 'gro ma yin no T for trikālānugato

<sup>(22)</sup> trikālānugato nanu JS : sthīratvaṃ manyate tadā K : sthīratvaṃ manyate tadā trikālānugato nanu Pā

<sup>(23)</sup> kālatrayāvasthito JKS : kalatrayāvasthito Pā

<sup>(24)</sup> gser brtan pa 'ga' yang yod pa ma yin te / rjes su 'gro ba dang chos mtshungs pas dngos po dus gsum du gnas par 'dod de T for hemānugamasādharma

<sup>(25)</sup> varṇaṃ J, Suganuma (kha dog T) : varṇaṃ KS, Pā

<sup>(26)</sup> na KS : naḥ J, Pā

<sup>(27)</sup> dus gsum du T for adhusu

<sup>(28)</sup> -kuṇḍalādy- KS, Pā : -kūṇḍalādy- J

<sup>(29)</sup> varṇasya em. (kha dog ni T, cf. AKBh 296,11: na varṇānyathātvaṃ; 296,12: na varṇam) : suvarṇasya JKS, Pā

<sup>(a)</sup> Cf. YBh 127,1–4: dharmasya dharmiṇi vartamānasyaivādhusv atītānāgatavartamāneṣu bhāvānyathātvaṃ bhavati, na tu dravyānyathātvaṃ. yathā suvarṇabhājanasya bhittvānyathākriyamāṇasya bhāvānyathātvaṃ bhavati, na suvarṇānyathātvaṃ iti.

padystate dharmah<sup>(31)</sup>, vartamānabhāvaparitāyāgena cātītabhāvam, na tu dravyānyathātvam,<sup>(a)</sup> sarvatra dravyasyāvvyabhicārāt. anyathānya evānāgato<sup>(32)</sup> 'nyo vartamāno 'nyo 'tīta iti prasajyate. kaḥ punar bhāvas teneṣṭaḥ<sup>(33)</sup>. guṇaviśeṣaḥ, yato 'tītādyabhidhānājñānapravṛtīḥ.<sup>(b)</sup>

(K504,13; S614,15; Pā146b17; D80b6; P115b4) lakṣaṇānyathāhvādī<sup>(34)</sup> bhadantaghoṣakaḥ. J192a3 sa kilāha: dharmo \* 'dhvasu vartamāno 'tīto 'tītalakṣaṇayukto 'nāgatapratyutpannābhyām lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ<sup>(c)</sup>, yathā puruṣa ekasyām striyām raktaḥ śeṣāsv aviraktaḥ, evam anāgata-pratyutpannāv api vācyau<sup>(35)</sup>.<sup>(d)</sup> asya hy atītādīlakṣaṇavṛttīlābhāpekṣo vyavahāra<sup>(e)</sup> iti pūrvakād bhedaḥ.

<sup>(30)</sup> chos skye ba ma 'ongs pa la sogs pa'i dngos po gzhan du 'gyur ba nyid yin te T for dharmasyānāgatādībhāvad anyathātvam

<sup>(31)</sup> chos rnam s T for dharmah

<sup>(32)</sup> evānāgato JS : evānāgate K, Pā

<sup>(33)</sup> teneṣṭaḥ JKS : tenoṣṭo Pā

<sup>(34)</sup> -pravṛtīḥ. lakṣaṇānyathāhvādī JKS : -pravṛttīlakṣaṇānyathāhvādī Pā

<sup>(35)</sup> vācyau Pā, S : vācye K

<sup>(a)</sup> **Ce'e** AKBh 296,9–14: bhāvānyathiko bhadantadharmatrātaḥ. sa kilāha: dharmasyādhvasu pravartamānasya bhāvānyathātvam bhavati, na dravyānyathātvam. yathā suvarṇabhājanasya bhittvānyathā kriyamāṇasya saṃsthānānyathātvam bhavati, na varṇānyathātvam. yathā ca kṣīraṃ dadhitvena pariṇamad rasavīryavipākān parityajati na varṇam. evaṃ dharmo 'py anāgatād adhvaṇaḥ pratyutpannam adhvānam āgacchann anāgatabhāvaṃ jahāti, na dravyabhāvam. evaṃ pratyutpannād atītam adhvānaṃ gacchan pratyutpannabhāvaṃ jahāti, na dravyabhāvam iti. Cf. also ADV 259,10–14: bhāvānyathiko bhadantadharmatrātaḥ. sa hy evam āha: dharmasyādhvasu pravartamānasyānāgatādībhāvamātram anyathā bhavati, na dravyānyathātvam. yathā suvarṇasya kaṭakādisaṃsthānāntareṇa kriyamāṇasya pūrvasaṃsthānanāṣe, na suvarṇanāṣaḥ. kṣīrasya vā dadhitvena pariṇamato yathā rasa-vīryavipākaparitāyāgo na varṇasyeti.

<sup>(b)</sup> Cf. AKBhṬ D136a2f.; P271b2–4; 秋本 [1993: 58,9–12]: dngos po dus rnam su 'jug pa ni rang bzhin 'khrul pa med pa'i phyir ro // gzhan du gzhan nyid du ste / ma 'ongs pa las gzhan da ltar byung ba la sogs pa dang 'das pa zhes bya bar de thal bar 'gyur ro // yang ma 'ongs pa la sogs pa'i dngos po 'di ci zhib ce na / gang las 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar byung ba'i shes pa dang brjod pa 'jug pa'i yon tan kyi khyad par ro //

<sup>(c)</sup> Cf. YBh 125,7: na cānāgatavartamānābhyām lakṣaṇābhyām vīyuktam.

<sup>(d)</sup> **Ce'e** AKBh 296,15–18: lakṣaṇānyathiko bhadantaghoṣakaḥ. sa kilāha: dharmo 'dhvasu pravartamāno 'tīto 'tītalakṣaṇayukto 'nāgatapratyutpannābhyām lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ. anāgato 'nāgatalakṣaṇayukto 'tītapratyutpannābhyām aviyuktaḥ. evaṃ pratyutpanno 'py atītānāgatābhyām aviyuktaḥ. tadyathā puruṣa ekasyām striyām raktaḥ śeṣāsv aviraktaḥ iti.

Cf. also ADV 259,17–260,1: lakṣaṇānyathiko bhadantaghoṣaka iha paśyaty atīto dharmo 'tītalakṣaṇena yukto 'nāgatapratyutpannalakṣaṇābhyām aviyuktaḥ, evam anāgatapratyutpannāv api. yathā puruṣaḥ ekasyām striyām rakto 'nyāsv aviraktaḥ.

Cf. also YBh 128,3–8: lakṣaṇaparīṇāmo dharmo 'dhvasu vartamāno 'tīto 'tītalakṣaṇayukto 'nāgatavartamānābhyām lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ. tathānāgato 'nāgatalakṣaṇayukto vartamānānūtibhyām lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ. tathā vartamāno vartamānalakṣaṇayukto 'tītānāgatābhyām lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ. yathā puruṣa ekasyām striyām rakto na śeṣāsu virakto bhavati.

<sup>(e)</sup> Cf. AKBhṬ D136a5; P271b6; 秋本 [1993: 58,18]: mtshan nyid gzhan du 'gyur ba ni mtshan nyid 'jug pa la thob pa la bltos nas tha snyad 'dogs te /

Cf. also SA 469,25: lakṣaṇānyathikasya lakṣaṇavṛttīlābhāpekṣo vyavahāraḥ.

(K504,17; S614,19; Pā147a2; D81a1; P115b6) avasthānyathāvādī bhadantavasumitraḥ. sa kilāha: dharmo 'dhvasu vartamāno 'vasthām avasthām prāpyānyo 'nyo nirdīśya-\*te 'vasthāntarataḥ, na dravyataḥ, dravyasya triṣv api kāleṣv abhinnatvāt<sup>(a)</sup>. yathā mṛdguḍikā ekānke prakṣiptā ekam ity ucyate, śatānke śataṃ, sahasrānke sahasram,<sup>(b)</sup> tathā kāritre 'vasthito bhāvo vartamānaḥ, tataḥ pracyuto 'tītas tadaprāpto 'nāgata iti. asya vyavasthāpekṣayā<sup>(36)</sup> vyavahāraḥ, yathā mṛdguḍikāyām<sup>(37)</sup>, na hi tasyāḥ<sup>(38)</sup> svabhāvānyathātvaṃ bhavati, kiṃ tarhi, sthānaviśeṣa-sambandhāt \* samkhyābhidyotakaṃ samjñāntaram<sup>(39)</sup> utpadyate.<sup>(c)</sup>

J192a4

J192a5

(K504,23; S615,3; Pā147a6; D81a4; P116a2) anyathānyathiko bhadantabuddhadevaḥ<sup>(40)</sup>, sa kilāha: dharmo 'dhvasu<sup>(41)</sup> vartamānaḥ pūrvāparam apekṣyānyo' nya ucyata iti. yathaikā strī mātā cocyate duhitā ceti.<sup>(d)</sup> asya pūrvāparāpekṣo vyavahāraḥ.<sup>(e)</sup> yasya pūrvam evāsti nāparaḥ so 'nāgataḥ, yasya pūrvam asti aparāṃ ca sa vartamānaḥ, yasyāparam eva na pūrvam so 'tīta<sup>(f)</sup> ity ete

(36) 'di yang gnas skabs la ltos nas T for asya vyavasthāpekṣayā

(37) -guḍikāyām JKS : -guḍikāyām Pā

(38) tasyāḥ JKS : tasyā Pā

(39) samjñāntaram JKS : samjñāntaram Pā

(40) bhadantabuddhadevaḥ Pā, S (btsun pa sangs rgyas lha T) : buddhadevaḥ K

(41) dus gsum T for adhvasu

(a) Cf. AKBhT D136b1; P272a3; 秋本 [1993: 59,5f.]: rdzas ni dus gsum char du yang tha [mi][mi om. AKBhT] dad pa'i phyir ro //

(b) **Ce'e** AKBh 296,19–21: avasthānyathiko bhadantavasumitraḥ. sa kilāha: dharmo 'dhvasu pravartamāno 'vasthām avasthām prāpyānyo 'nyo nirdīśyate 'vasthāntarato, na dravyāntarataḥ. yathaikā vartikaikānke nikṣiptaikam ity ucyate śatānke śataṃ sahasrānke sahasram iti.

Cf. also ADV 260,3–6: avasthānyathiko bhadantavasumitraḥ. sa khalv āha: dharmo 'dhvasu pravartamāno 'vasthām avasthām prāpyānyathānyathāstīti nirdīśyate. avasthāntaraviśeṣavikārāt svabhāvāparityāgāc ca. yathā nikṣepavartikaikānkaṃvinyastāikety ucyate, saiva śatānke śataṃ sahasrānke sahasram iti.

Cf. also YBh 130,1–4: dharmās ... tāṃ tāṃ avasthām prāpnuvanto 'nyatvena pratinirdīśyante, avasthāntarataḥ, na dravyāntarataḥ. yathaikā rekhā śatasthāne śataṃ daśasthāne daśaikā caikasthāne.

(c) Cf. AKBhT D136b3f.; P272a5f.; 秋本 [1993: 59,9f.]: de rang bzhin gzhan du 'gyur ba ni ma yin gyi / 'o na ci zhe na / gnas kyi khyad par dang 'brel pa las grans ston par byed pa'i ming gzhan du 'byung ngo //

Cf. also AKVy 470,11–13: na punas tasyāḥ svabhāvānyathātvaṃ, kiṃ tarhi, sthānāntaraviśeṣāt samkhyābhidyotakaṃ samjñāntaram utpadyate.

(d) **Ce'e** AKBh 297,1–3: anyathānyathiko bhadantabuddhadevaḥ. sa kilāha: dharmo 'dhvasu pravartamānaḥ pūrvāparam apekṣyānyo 'nya ucyate, nāvasthāntarato, na dravyāntarataḥ. yathaikā strī mātā cocyate duhitā ceti[vocyate duhitā veti Pradhan].

Cf. also ADV 260,7–10: anyathānyathiko bhadantabuddhadevaḥ. sa brūte: dharmo 'dhvasu pravartamānaḥ pūrvāparam apekṣya[avekṣya Jaini] anyathā cānyathā cocyate. naivāsya bhāvānyathātvaṃ bhavati dravyānyathātvaṃ vā. yathaikā strī pūrvāparam apekṣya mātā cocyate duhitā ca.

Cf. also YBh 130,4–5: yathā caikatve 'pi strī mātā cocyate duhitā ca svasā ceti.

(e) Cf. AKBhT D136b5; P272a8; 秋本 [1993: 60,1]: 'di ni snga ma dang phyi ma la bltos nas tha snyad brjod do // AKVy 470,16–17: pūrvāparāpekṣo 'nyathānyathikasya vyavahāraḥ.

(f) Cf. AKBhT D136b5f.; P272a8–272b1; 秋本 [1993: 60,1–3]: gang la snga ma kho na yod kyi / phyi ma med pa de ni ma 'ongs pa yin la / gang la phyi ma kho na yod kyi snga ma med pa de ni 'das pa yin zhing / gang la snga ma dang phyi ma yod pa de ni da ltar ba yin no //

J192a6 *catvārāḥ sarvāsti-\**vādā<sup>(42)(a)</sup> bhāvalakṣaṇāvasthānyathānyathikasamjñitāḥ<sup>(43)(b)</sup>.

(K504,27; S615,8; Pā147a8; D81a7; P116a5) tatra prathamah pariṇāma<sup>(44)</sup>-vāditvāt *sāṃkhyamatān* na bhidyate.<sup>(c)</sup> yas tasya pratiṣedhaḥ so 'syāpi draṣṭavyaḥ.<sup>(d)</sup> tathā hi pūrvasvabhāvāparityāgena vā pariṇāmo bhavet parityāgena vā. yady aparityāgena, tadādhvasaṃkara<sup>(45)</sup>-prasaṅgaḥ. atha parityāgena, tadā sadāstitvavirodhaḥ.<sup>(e)</sup>

(K505,3; S615,12; Pā147a9; D81b1; P116a7) dvitīyasyāpi vādino 'dhvasaṃkara<sup>(46)</sup> eva, sar-  
J192a7 vasya sarva-*lakṣaṇayogāt*.<sup>(f)</sup> puruṣas<sup>(47)</sup> tv arthāntarabhūtarāgasamudācārād rakta ucyate 'viraktaś<sup>(48)</sup> ca samanvāgamamātreṇa,<sup>(g)</sup> na tu dharmasya lakṣaṇasamudācāro lakṣaṇasamanvāgamo vā prāptilakṣaṇo<sup>(49)</sup> 'sti, anyatvaprasaṅgāl lakṣaṇasya prāptivad iti na sāmīyam<sup>(h)</sup> drṣṭāntasya<sup>(50)</sup> dārṣṭāntikena<sup>(51)(52)</sup> (i)

trītyasya kāritreṇādhva<sup>(53)</sup>-vyavastheti<sup>(54)</sup> tasya<sup>(55)</sup> vistareṇa dūṣaṇaṃ vakṣyate.

(42) sarvāstivādā Pā, S : sarve 'stivādā K

(43) ... gzhan te / gzhan la sogs pa' i ming can T for -anyathānyathikasamjñitāḥ

(44) prathamah pariṇāma- JKS : prathamapariṇāma- Pā

(45) -saṃkara- JKS : śaṃkara- Pā

(46) 'dhvasaṃkara J, Sugaṇuma ('dus 'tshol bar 'gyur te T) : adhvasaṃkara Pā : 'yam saṃkara KS

(47) puruṣas K, Pā : ruṣas S

(48) ma chags pa T for 'viraktaś

(49) thob pa' i mtshan nyid kyi ldan pa T for lakṣaṇasamanvāgamo [vā] prāptilakṣaṇaḥ

(50) drṣṭāntasya n.e. T

(51) dārṣṭāntikena JS : dārṣṭyāntikena K, Pā

(52) dpe las byung ba' i don dang T for dārṣṭāntikena

(53) -adhva- n.e. T

(54) adhvavyavastheti K (dus rnam par gzhag pa T) : adhvasvavastheti JS, Pā

(55) tasya n.e. T

(a) **Ce'** AKBh 297,3: ete catvārāḥ sarvāstivādāḥ.

(b) **Ce'e** AK 5.26ab (=AKBh 296,8): bhāvalakṣaṇāvasthānyathānyathikasamjñitāḥ.

(c) Cf. AKBh 297,4: eṣāṃ tu prathamah pariṇāmavāditvāt sāṃkhyapakṣe nikṣeptavyaḥ.

(d) Cf. AKBhṬ D137a2–3: de' i dgag pa gang yan pa de ni 'di' i yang yin no zhes bstan pa yin la /

AKVy 470,20: yaḥ saṃkhyapakṣe pratiṣedhaḥ, sa eva tatpakṣasya pratiṣedhaḥ.

(e) Cf. AKBhṬ D137a4–5: [btsun pa dgyig bshes kyi phyogs las yang] gal te snga ma' i chos kyi gnas skabs btang nas phyi ma' i gnas skabs sgrub pa 'di yang yongs su 'gyur bar smra ba las tha dad pa ma yin no // 'on te snga ma' i gnas skabs yongs su btang bde ltan yang gnas skabs 'chol 'chol bas dus 'chol bar thal bar 'gyur ro //

(f) Cf. YBh 128,9–129,1: sarvasya sarvalakṣaṇayogād adhvasaṃkaraḥ prāpnoti parair doṣaś codyata iti.

(g) Cf. AKBh 297,4–6: dvitīyasyādhvasaṃkaraḥ prāpnoti. sarvasya sarvalakṣaṇayogāt. puruṣasya tu kasyāṃcit striyāṃ rāgaḥ samudācarati, kasyāṃcit kevalaṃ samanvāgamaḥ.

(h) Cf. AKBh 297,6: ... iti kim atra sāmīyam.

(i) Cf. AKBhṬ D137a7–b2, P273a3–6, 秋本 [1993: 61,5–11]: ci ste thob pa' i 'jug pa ldan par brjod na / cig shos dang cig shos mi ldan pa zhes bya ba' i don mtshungs pa nyid med do // de la kha cig la mtshan nyid cung zad kun tu spyod pa don gzhan du gyur pa med pas de ga la ldan te / cig shos la mi ldan no // ... skyes bu bud med kyi gong du gzhan la 'dod chags kun tu 'byung zhing shas che ba ni bud med la chags pa zhes bya la / ldan pa' i sgo nas ni 'dod chags dang ma bral ba zhes bya na / chos la ni mtshan nyid kun tu 'byung ba 'am mtshan nyid dang mi ldan pa med de / chos rnam kyi mtshan nyid dag ni dus rnam su 'khrul pa med pa' i phyir ro //

caturthasyāpy ekasmi-\*nn evādhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvanti. tathā hy atīte 'dhvani pūrvapaścimau kṣaṇāv atītānāgatau madhyamaḥ kṣaṇaḥ pratyutpanna<sup>(a)</sup> ity eṣā dūṣaṇadig<sup>(56)</sup> eṣāṃ spaṣṭā<sup>(57)</sup>. J192a8

(K505,9; S615,20; Pā147a13; D81b4; P116b2) ṛtīyam evārabhya bhūyas traikālyaparīkṣārābhyate. hemadṛṣṭāntena tu siddhāntopakṣepamātram kṛtam, na tu dharmatrātadarśanam evābhimatam. tathā ca vakṣyati: \* J192b1

**kāritreṇa vibhāgo 'yam adhvanām yat prakalpyate<sup>(58)</sup> /<sup>(b)</sup> (TS 1790cd)**

iti. na ca<sup>(59)</sup> dharmatrātasya kāritreṇādhvavyavasthā, kiṃ tarhi, vasumitrasya. (TSP ad TS 1786)

(Pā33a15; D65b1; P97a4)

**atī-\*tājātayor jñānam anyathāviśayaṃ bhavet<sup>(c)</sup> /** J90b5

**dvayāśrayaṃ ca vijñānaṃ tāyinā kathitaṃ katham // (TS 1787)**

**karmātītaṃ ca niḥsattvaṃ katham phaladam iṣyate /**

**atītānāgate jñānaṃ<sup>(60)</sup> vibhaktam yoginām \* ca kim<sup>(61)</sup> // (TS 1788)** J90b6

**na dravyāpohaviṣayā atītānāgatās tataḥ /**

**adhvasaṃgraharūpādibhāvāder vartamānavat<sup>(62)</sup> // (TS 1789)**

(K505,12; S615,24; Pā147a14; D81b6; P116b4) tatra yady atītānāgataṃ na syāt, abhūn mahāsammato bhaviṣyati śaṅkhaś cakravartīty **atītājātayor** vijñānaṃ nirālambanam eva syāt, tatas ca vijñānam eva na syād ālambanābhāvād<sup>(d)</sup> iti bhāvaḥ. tathā hi prativastuvijñāptiyātmakaṃ vijñānam, asati ca jñeye na kiṃcid anena jñeyam ity \* avijñānam eva syāt.<sup>(e)</sup> J192b2

<sup>(56)</sup> sun 'byin pa'i lan T for dūṣaṇadig

<sup>(57)</sup> gsal ba'i phyir T for spaṣṭā

<sup>(58)</sup> prakalpyate JKS : prakalpata Pā

<sup>(59)</sup> 'di ltar ... ma yin no T for na ca

<sup>(60)</sup> atītānāgate jñānaṃ JK, Pā : atītānāgataṃ jñānaṃ S (cf. 'das dang ma 'ongs shes T)

<sup>(61)</sup> 'grub add. T

<sup>(62)</sup> -rūpādibhāvāder vartamānavat JS, Pā (cf. ... gzugs la sogs // dngos po la sogs da ltar bzhin T) : -rūpād vibhāvāder vartamānavat K

<sup>(a)</sup> **Ce'e** AKBh 297,6–8: caturthasyapy ekasminn evādhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvanti. atīte 'dhvani pūrvapaścimau kṣaṇāv atītānāgatau madhyamaḥ kṣaṇaḥ pratyutpanna iti. evam anāgate 'pi.

<sup>(b)</sup> Cf. AKBh 297,11 (=AK 5.26cd): adhvanāḥ kāritreṇa vyavasthitāḥ.

<sup>(c)</sup> Cf. YBh 186,6–7: yadi caitat svarūpato nābhaviṣyat, nirviśayaṃ jñānam udapatsyata.

<sup>(d)</sup> Cf. AKBh 295,18f.: satī viśaye vijñānaṃ pravartate nāsati. yadi cātītānāgataṃ na syād, asadālambanaṃ vijñānaṃ syāt. tato vijñānam eva na syād ālambanābhāvāt.

<sup>(e)</sup> Cf. AKBhṬ D135b3f.; P271a2f.; 秋本 [1993: 57,12f.]: rnam par shes pa ni dngos po so sor rnam par rig pa yin na rnam par shes par bya ba med na ni 'dis cung zad kyang rnam par mi shes pas des na rnam par shes pa nyid du yang mi 'gyur ro //

(K505,16; S616,6; Pā147a16; D82a1; P116b6) kiṃ ca

dvayaṃ pratītya vijñānam utpadyata<sup>(a)</sup>

iti bhagavatoktam:

katamad dvayaṃ<sup>(63)</sup>. cakṣū rūpāni yāvan<sup>(64)</sup> mano dharmā<sup>(b)</sup>

J192b3 iti. asati cātītānāgate tadālambanaṃ vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syād<sup>(c)</sup> ity āgamavirodhaḥ. api cātītaṃ karma **phaladaṃ** na syāt, yadi tan<sup>(65)</sup> **niḥsattvaṃ** sattāśūnyaṃ bhavet, phalotpattikāle vipākahetur abhāvāt.<sup>(d)</sup> na cāsataḥ kāryotpādanaśaktir asti, sarvasā-\*marthyavirahalakṣaṇatvād asattvasya.

kiṃ cāsīn māndhātā<sup>(66)</sup> brahmadattaḥ<sup>(67)</sup>, bhaviṣyati śāṅkhaś cakravartī<sup>(68)</sup> maitreyas<sup>(69)</sup> tathāgata ityādinā vibhāgena<sup>(70)</sup> **yoginām** atītādiviṣayaṃ **vibhaktam** vijñānaṃ na syāt. na hy asatāṃ vibhāgo 'sti. tasmād<sup>(71)</sup> atītānāgatā bhāvāḥ śrīharsādayo<sup>(72)</sup> na dravyapratīṣedharūpāḥ, adhvasaṃgrhītarūpādītvenopadiṣṭatvād vartamānavat. uktaṃ hi bhagavatā:

J192b4 a-\*tītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nābhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvako 'tite rūpe<sup>(73)</sup> 'napekṣo

<sup>(63)</sup> katamad dvayaṃ JKS : katamadvyayam Pā

<sup>(64)</sup> yāvan JKS : yovan Pā

<sup>(65)</sup> tan n.e. T

<sup>(66)</sup> māndhātā JS, Pā (cf. rgyal po nga las nu T, Māndhātar Schayer 34, n.2) : māndhāno K

<sup>(67)</sup> brahmadattaḥ n.e. T

<sup>(68)</sup> 'khor los sgyur ba'i rgyal po dung T for śāṅkhaś cakravartī

<sup>(69)</sup> maitreyas JKS : maitriyas Pā

<sup>(70)</sup> vibhāgena n.e. T

<sup>(71)</sup> tasmād JK, Pā (de lta bas na T, tataḥ TS 1789b) : yasmād S

<sup>(72)</sup> rgyal po dga' ba'i dpal la sogs pa T for śrīharsādayo

<sup>(73)</sup> 'tite rūpe J : 'titarūpe KS, Pā

<sup>(a)</sup> **Cee** 『雜阿含經』 Taisho 99, vol. 2, 54a23f.: 有二因緣生識。(AKBh 295,14; 464,10f.; 467,2: dvayaṃ pratītya vijñānasyotpādaḥ [bhavati AKBh 464,11].)

Cf. *Samyuttanikāya* (PTS) IV 67, ADV 269,2.

See also 秋本・本庄 [1978: 100f.], Honjo[1984: 78f.], Pāsādika[1986: 97].

<sup>(b)</sup> **Ce** 『雜阿含經』 Taisho 99, vol. 2, 54a24f.: 何等爲二。謂眼色耳聲鼻香舌味身觸意法。(AKBh 295,14–15.: dvayaṃ katamat. cakṣū rūpāni yāvat mano dharmāḥ.)

Cf. *Samyuttanikāya* (PTS) IV 67-69, ADV 269,2–3.

See also 秋本・本庄 [1978: 100f.], Honjo[1984: 78f.], Pāsādika[1986: 97].

<sup>(c)</sup> **Ce\*e** AKBh 295,15: asati vātītānāgate tadālambanaṃ vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syāt.

<sup>(d)</sup> Cf. AKBh 295,21–296,1: yadi cātītaṃ na syāt, śubhāśubhasya karmaṇaḥ phalam āyatyāṃ katham syāt. na hi phalotpattikāle vartamāno vipākahetur asti.

Cf. YBh 186,8–10: kiṃ ca bhogabhogīyasya vāpavargabhāgīyasya vā karmaṇaḥ phalam utpitsu yadi nirupākhyam iti taduddeśenatena nimittena kuśalānuṣṭhānaṃ na yujyeta.

'bhaviṣyat. yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ, tasmāc chrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe<sup>(74)</sup>  
'napekṣo bhavati<sup>(a)</sup>

iti vistaraḥ. tathā:

yat kiṃcid rūpaṃ atītaṃ anāgatādi tat sarvaṃ abhisamkṣīpya rūpaskandha iti samkhyāṃ  
gacchati<sup>(b)</sup>

ityādi.

(K505,26; S616,20; Pā147b6; D82a7; P117a6) adhvanā saṃgraho yeṣāṃ te '**dhvasaṃgrahā rūpādayaḥ. ādiśabdena vedanādipari-\***grahaḥ. teṣāṃ **bhāvo** rūpāditvam. atrāpy **ādiśabdena** duḥkhasamudayaṇityānātmāditvenopadiṣṭatvād iti gr̥hyate. (TSP ad TS 1787–1789)

J192b5

(K506,3; S616,23; Pā147b6; D82b1; P117a7) athāpi syāt: ākāśavat sadāvasthitatvād atītādivyavasthā<sup>(75)</sup> tarhi katham ity āha: **na caivam** ityādi.

(Pā33a17; D65b2; P79a6)

**na caivam iha mantavyam adhvabhedah kuto nv ayam<sup>(76)</sup> /**

**kāritreṇa vibhāgo 'yam a-\***dhvanāṃ yat<sup>(77)</sup> prakalpyate<sup>(c)</sup> // (TS 1790)

J91a1

**kāritre vartate yo hi vartamānaḥ<sup>(78)</sup> sa ucyate /**

**kārirāt pracyuto 'tītas tadaprāptas tv anāgataḥ // (TS 1791)**

**phalākṣepas ca kāritraṃ dharmāṇāṃ janakaṃ na tu<sup>(d)</sup> /**

<sup>(74)</sup> 'tīte rūpe Pā : 'tītarūpe JKS

<sup>(75)</sup> atītādivyavasthā KS : atītāvyavasthā J

<sup>(76)</sup> rjes 'gro T for nv ayam

<sup>(77)</sup> dus rnams rtag par 'gyur T for ayam adhvanāṃ

<sup>(78)</sup> de ni de lta ba ru brjod T for vartamānaḥ sa ucyate

<sup>(a)</sup> **Ce** 『雜阿含經』 Taisho 99, vol.2, 20a14–21: 比丘。若無過去色者。多聞聖弟子。無不顧過去色。以有過去色故。多聞聖弟子。不顧過去色。(AKBh 295,9f.: atītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nābhaviṣyan, na śrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat. yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ, tasmāc chrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavati.)

Cf. *Samyuttanikāya* (PTS) III 19f., ADV 264,3–5; 265,1–6, *Madhyamakavṛtti* 22.11.

See also 秋本・本庄 [1978: 100], Honjo [1984: 78f.], Pāsādika [1986: 97].

<sup>(b)</sup> **Ce'e** 『雜阿含經』 Taisho 99, vol.2, 13b15–17: 若所有諸色。若過去若未來若現在。若內若外。若麤若細。若好若醜。若遠若近。彼一切總說色陰。(AKBh 13,5f. ad AK 1.20ab: yat kiṃcid rūpaṃ atītānāgatapratyutpannam ādhyātmikabāhyam audārikaṃ vā sūkṣmaṃ vā hīnaṃ vā praṇītaṃ vā yad vā dūre yad vā antike tat sarvaṃ aikādhyam abhisamkṣīpya rūpaskandha iti samkhyāṃ gacchati.)

<sup>(c)</sup> Cf. AKBh 297,11 (=AK 5.26cd): adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitāḥ.

<sup>(d)</sup> Cf. 『阿毘達磨順正理論 (卷第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 631c5-7: 諸法勢力總有二種。一名作用。二謂功能。引果功能名為作用。(See also 菅沼 [1964: 86, n.(32)].)

J191a2 **na vā-\*kṣepo 'sty<sup>(79)</sup> atītānām nātaḥ kārītrasambhavaḥ // (TS 1792)**

**yataḥ samprāptakāritro vartamāna ucyate, uparatakāritro 'tītaḥ, aprāptakāritro 'nāgata<sup>(a)</sup>**  
 J192b6 ity adhvanāḥ kārītreṇa vyavasthitāḥ.<sup>(b)(c)</sup> kiṃ punar atra \* kārītram abhipretam. yadi  
 darśanādīlakṣaṇo vyāpāraḥ, yathā pañcānām cakṣurādīnām darśanādīkam<sup>(d)</sup>, yataś cakṣuḥ paśyati  
 śrotraṃ śṛṇoti ghrāṇam jighrati jihvā svādayatītyādi<sup>(e)</sup>, vijñānasyāpi vijñātrtvam<sup>(f)</sup> vijñāntī  
 kṛtvā, rūpādīnām indriyagocaratvam<sup>(g)</sup>, evaṃ satī pratyutpannasya tatsabhāgasya cakṣuḥ  
 nidrādyavasthāyām kārītrābhāvād vartamānatā na syāt.<sup>(h)</sup>

J192b7 (K506,16, S617,12; Pā147b10; D82b4; P117b3) atha pha-\*ladānagrahaṇalakṣaṇam kārītram<sup>(i)</sup>,  
 yathā cakṣuṣaḥ<sup>(80)</sup> sahabhuvo<sup>(81)</sup> dharmā jātyādayaḥ puruṣākārāphalam<sup>(82)</sup>, anantarotpannam  
 cakṣurindriyam puruṣākārāphalam<sup>(83)</sup> adhipatīphalam niṣyandaphalam<sup>(84)</sup> ca, etatphalajanānt<sup>(85)</sup>

<sup>(79)</sup> vākṣepo 'sty S (vākṣepo sti J, Pā) : vākṣeposty K

<sup>(80)</sup> cakṣuṣaḥ J, Pā (mig gi T) : cakṣuṣā KS

<sup>(81)</sup> sahabhuvo J (cf. lhan cig 'byung ba rnams T) : sahabhavā KS : sahabhavo Pā

<sup>(82)</sup> puruṣākārāphalam J (skyes bu byed pa'i 'bras bu yin T) : puruṣākārāphalam KS, Pā

<sup>(83)</sup> puruṣākārāphalam KS, Pā : puruṣākārāphalam J

<sup>(84)</sup> rgyu mthun pa'i 'bras bu yin pa'i rang bzhin T for niṣyandaphalam

<sup>(85)</sup> etatphalajanānt em. (cf. 'di ni 'bras bu skyed par byed pa'i phyir T) : etat phalam jananāt JKS, Pā

<sup>(a)</sup> Cf. AKBh 297,12f.: yadā sa dharmāḥ kārītram na karoti, tadānāgataḥ. yadā karoti, tadā pratyutpannaḥ. yadā kṛtvā  
 niruddhas, tadāṭītaḥ.

YBh 130,7–9: yadā dharmāḥ svavyāpāraṃ na karoti, tadānāgataḥ. yadā karoti tadā vartamānaḥ. yadā kṛtvā nivṛttas  
 tadāṭītaḥ.

YBh 186,5–6: bhaviṣyadyaktikam anāgamat, bhūtavyaktikam atītam, vyāpāropārūḍham vartamānam.

<sup>(b)</sup> Ce' AK 5.26c'd: adhvanāḥ kārītreṇa vyavasthitāḥ.

<sup>(c)</sup> Cf. 『阿毘達磨順正理論(卷第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 631b17-21: 約作用立三世有異。謂一切行作用未有名為未來。有作用時名為現在。作用已滅名為過去非體有殊。此作用名為何所目。目有為法引果功能。即餘性生時能為因性義。若能依此立世有殊。(See also 蒼沼 [1964: 86, n.(32)].)

<sup>(d)</sup> Cf. AKBhṬ D137b2f.; P273a7; 秋本 [1993: 61,15]: bya ba yang mig la sogs rnams kyi ni lta ba la ba la sog s pa'o // and  
 AKVy 76,34–77,1: kārītram cakṣurādīnām darśanādi; 471,7: kārītram punaḥ cakṣurādīnām darśanādīnīti. (See  
 also 秋本 [1993: 61, n.159].)

<sup>(e)</sup> Cf. AKBh 31,15f. (Y. Ejima's ed. 49,19f.): cakṣuḥ paśyati, śrotraṃ śṛṇoti, ghrāṇam jighrati, jihvāsvādayati, kāyaḥ  
 sprśati, mano vijñāntīti.

<sup>(f)</sup> Cf. AKBhṬ D137b3; P273a7f.; 秋本 [1993: 61,15f.]: nram par shes pa'i ni nram par shes pa'o // (See also 秋本  
 [1993: 61, n. 159].)

Cf. also AKVy 77,1: vijñānadhātūnām vijñātrtvam.

<sup>(g)</sup> Cf. AKBhṬ D137b3; P273a8; 秋本 [1993: 61,16]: gzugs la sogs rnams kyi ni rang gi dbang po'i spyod yul nyid  
 do // and AKVy 471,7f.: rūpādīnām api svendriyagocaratvam kārītram. (See also 秋本 [1993: 61, n.159].)

Cf. also AKVy 77,1f.: viṣayadhātūnām tadviṣayāḥ lambanabhāvaḥ.

<sup>(h)</sup> Cf. AKBh 297,15: yady evaṃ pratyutpannasya tatsabhāgasya cakṣuṣaḥ kiṃ kārītram.

Cf. also AKBhṬ D137b5f.; P273b2f.; 秋本 [1993: 62,3f.]: mig gi bya ba ni lta ba yin na / de yang de dang  
 mtshungs par byed pa ma yin pas de'i tshe da ltar ba yang ma 'ongs par 'gyur ba'i phyir ... and AKVy 471,9–11:  
 yad dhi kārītralakṣaṇam svakarma na karoti tat tatsabhāgaḥ. tasya ca nāsti kārītram darśanalakṣaṇam. katham tat  
 pratyutpannam ...

<sup>(i)</sup> Cf. AKBh 297,16: phaladānapatigrahaṇam.

prayacchad<sup>(86)</sup> dhetubhāvāvasthānād gr̥hṇac cakṣur vartamānam ucyata iti.<sup>(a)</sup>

(K506,19; S617,17; Pā147b12; D82b6; P117b5) evaṃ tarhy atītānām<sup>(87)</sup> api sabhāga-sarvatragavipākahetūnām phaladānābhyupagamād vartamānatva-*\*prasaṅgaḥ*.<sup>(b)</sup> atha samastam J192b8  
eva phaladānagrahaṇalakṣaṇam kārītram iṣyate, evam apy<sup>(88)</sup> atītasya sabhāgahetvāder ardha<sup>(89)</sup>-  
vartamānatvaprasaṅga<sup>(c)</sup> ity etaddoṣa<sup>(90)</sup>-bhayād ācāryasaṃghabhadrā<sup>(91)</sup> āha:

**dharmāṇām kārītram** ucyate **phalākṣepaśaktiḥ, na tu** phalajanānam, **na cātītānām**  
sabhāgahetvādīnām **phalākṣepo 'sti**, vartamānāvasthāyām evākṣiptatvāt. na  
cākṣiptasyākṣepo *\* yukto 'navasthāprasaṅgāt. tasmād atītānām na*<sup>(92)</sup> **kārītrasambhava** J193a1  
iti nāsti lakṣaṇasaṃkāra<sup>(93)(d)(e)</sup>

(86) prayacchad JKS : prayacchatu Pā

(87) 'das pa dang ma 'ongs pa rnam s T for atītānām

(88) evam apy J (de lta na yang T) : evam KS, Pā

(89) ardha- n.e. T

(90) etaddoṣa- n.e. T

(91) -saṃghabhadrā em. (Frauwallner[1973: 107], cf. 'dus bzang T) : -saṃhatabhadrā JS, Pā : -sahantabhadrā K

(92) na JS, Pā (srid pa ma yin pa'i phyir T) : sa K

(93) -saṃkāra JKS : -śaṃkāra Pā

(a) **Ce'e** AKBhT D137b7–138a1; P273b5f.; 秋本 [1993: 62,7–10]: lhan cig 'byung ba'i chos rnam ni de'i skyes bu byed pa'i 'bras bu yin la / de ma thag tu 'byung ba'i mig gi dbang po ni skyes bu byed pa'i 'bras bu dang / rgyu mthun pa'i 'bras bu yin no // 'bras bu de yang 'byin pa dang / 'dzin pa na da ltar ba zhes bya'o // Cf. AKVy 471,11–15: tac cakṣuḥ svaṇiṣyandaphalaṃ parigrhṇāty ākṣipati. phalaṃ ca dadāti niṣyandaphalam ananyat tu phalaṃ karotīti. tasya phaladānaparigrahasadbhāvāt tat pratyutpannam iti vyavasthāpyate.

Cf. also 『阿毘達磨順正理論 (卷第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 631c32-5: 若約作用立三世別。彼同分攝眼等諸根。現在前時有何作用。若謂彼能取果與果。是則過去同類因等。既能與果應有作用。有半作用世相應雜。(See also 菅沼 [1964: 86, n.(36)].)

(b) Cf. AKBhT D138a1; P273b6–8; 秋本 [1993: 62,10–13]: **'o na ni skal ba mnyam pa'i rgyu la sogs pa** (AKBh 297,16) zhes bya ba ni / skal ba mnyam pa dang / kun tu 'gro ba dang / rnam par smin pa'i rgyu rnam so // **'bras bu 'byin pa'i phyir** (AKBh 297,16) dang zhes bya ba la rgyu mthun[ 'thun P] pa dang / gal te bya ba so so[sor P] bar 'dod na bya ba yod par thal bar 'gyur la / de'i phyir 'das pa yang da ltar ba nyid du thal bar 'gyur ro //

(c) Cf. AKBhT D138a2; P274b8; 秋本 [1993: 63,1f.]: gal te 'bras bu 'byin pa dang 'dzin pa mtha' dag bya bar 'dod na / de lta na bya ba yang snga ma bzhin du snga ma nyid du 'gyur ro //

Cf. also AKBh 297,16f.: atītānām api tarhi sabhāgahetvādīnām phaladānāt kārītraprasaṅgo 'rdhakārītrasya vā.

(d) Cf. AKBh 297,17: ... iti lakṣaṇasaṃkārah.

(e) Cf. 『阿毘達磨順正理論 (卷第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 631c5–17: 諸法勢力總有二種。一名作用。二謂功能。引果功能名為作用。非唯作用總攝功能。亦有功能異於作用。且闇中眼見色功能為闇所違非違作用。謂有闇障違見功能。故眼闇中不能見色。引果作用非闇所違。故眼闇中亦能引果。無現在位作用有闕。現在唯依作用立故。諸作用減不至無為。於餘性生能為因性。此非作用但是功能。唯現在時能引果故。無為不能引自果故。唯引自果名作用故。由此經主所舉釋中。與果功能亦是作用。良由未善對法所宗。以過去因雖能與果無作用故世相無雜。(See also 菅沼 [1964: 86, n.(39)], 秋本 [1993: 63, n.191].)

Cf. also AKBhT D138a2–5; P273b8–274a4; 秋本 [1993: 63,2–9]: **slob dpon 'dus bzang** na re / dngos po rnam kyi bya ba'i 'bras bu 'phen pa'i nus pa ni 'bras bu 'byin pa ma yin pas mtshan nyid 'chol ba med do zhes zer ro // nus pa 'ba' zhig bya ba nyid ma yin te / 'o na ci zhe na / de las tha dad pa'i nus pa yang yod do // de bzhin du mun[ min D] pa la mig gi lta ba'i nus pa[mig las tha dad pa'i nus pa D] 'joms pa'i bya ba ni ma yin pas // gang yang 'gags pa

iti. (TSP ad TS 1790–1792)

(K506,26; S617,24; Pā147b15; D83a2; P118a1) **tair** ityādinā pratividhatte.

(Pā33b2; D65b4; P78a8)

**taiḥ kārītram idaṃ dharmād anyat tadrūpam eva vā /  
abhyupeyaṃ yad anyāsti gatiḥ kācin na vāstavī // (TS 1793)**

J91a3 **anyatve vartamānānām<sup>(94)</sup> prāg ūrdhvaṃ \* vāsvabhāvātā /  
hetutvasaṃskṛtatvādeḥ kārītrasyeva gamyatām // (TS 1794)  
anyathā nityatāsaktiḥ<sup>(95)</sup> svabhāvāvasthiteḥ sadā /  
naitadrūpātiriktaṃ hi vidyate nityalakṣaṇam // (TS 1795)**

J193a2 **tat kārītram dharmād anyad vā syād, ananyad veti tair** abhyupagantavyam, anyānanyayor  
anyonyaparīhāraṣṭhitalakṣaṇatvā<sup>(a)</sup>. ekaṇiṣeḍhasyāparavidhināntarīyakatvāt. **nānyā** vastuno  
**gatiḥ<sup>(96)</sup> asti.** tatra yady anyat<sup>(97)</sup>, tadā **vartamānānām prāgūrdhvāvasthayoḥ** niḥsvabhāvātā  
\* prāpnoti, **hetutvasaṃskṛtatvāder<sup>(98)(99)</sup>** dhetoḥ **kārītravat<sup>(100)</sup>.** **ādiśabdena** vastutvādayo  
gr̥hyante<sup>(101)</sup>. **anyathā** yadi prāg ūrdhvaṃ ca niḥsvabhāvātā na syāt, tadā sarvasya saṃskṛtasya  
nityatā<sup>(102)</sup> prāpnoti, svabhāvasya sarvadā vyavasthitatvāt. na ca sadāsattvavyatirekeṇa **nityatva-**  
**lakṣaṇam** asti. yad āha:

nityaṃ tam āhur vidvāṃso yaḥ svabhāvo na naśyati /<sup>(b)</sup>

iti. (TSP ad TS 1793–1795)

<sup>(94)</sup> gnas pa na T for vartamānānām

<sup>(95)</sup> nityāsaktiḥ em. (cf. rtag pa nyid du 'gyur T, TSP 618,18) : nityatāsattiḥ JS, Pā : nityatāpattiḥ K

<sup>(96)</sup> go skabs T for gatiḥ

<sup>(97)</sup> anyat KS, Pā : anyatra J

<sup>(98)</sup> -saṃskṛtatvāder JS : -saṃskṛtatvād K, Pā

<sup>(99)</sup> rgyud nyid dang 'dus byas nyid la sogs pa'i phyir T for hetutvasaṃskṛtatvāder

<sup>(100)</sup> bya ba bzhin du ni dpe'o T for kārītravat

<sup>(101)</sup> gr̥hyante JK, Pā : gr̥hyate S

<sup>(102)</sup> rtags bzhin du T for nityatā

skyes pa 'dus byas kyī chos rñams kyī mthu'i khyad par dngos po gzhan skyes pa la rgyur gyur pa 'di dag gi nus pa  
nyid bya ba ma yin pa / da ltar ba'i gnas skabs kho na 'phangs pa'i phyir / 'dus ma byas rñams kyis 'bras bu 'phen  
pa mi 'thad pa'i phyir ro // 'bras bu 'phen pa'i bha ba nyid yin gyi 'bras bu 'byin pa'i bya ba ma yin no //

<sup>(a)</sup> Cf. PVin 3 65,6: anyonyaparīhāraṣṭhitalakṣaṇatayā vā virodhaḥ. Cf. also PVin 2 60,7f.: anyonyavyatirekasthita-  
lakṣaṇatā vā virodho nityānityatvat; NB 3.75: parasaparīhāraṣṭhitalakṣaṇatayā vā bhāvābhāvavat.

<sup>(b)</sup> Ce PV 2.204ab: nityaṃ tam āhur vidvāṃso yaḥ svabhāvo na naśyati /

(K507,13; S618,18; Pā148a2; D83a6; P118a5) syād etat<sup>(103)</sup>: yadi nāma nityatāsaktiḥ<sup>(104)</sup>, \* J193a3  
 hetutvasaṃskṛtatvādes<sup>(105)</sup> tu hetoḥ katham sādhyavipakṣeṇa virodha ity āha: **nityasyetyādi**.

(Pā33b4; D65b5; P79b2)

**nityasya hetu-*\*tā* pūrvam kramākramavirodhataḥ /** J91a4  
**niṣiddhā saṃskṛtatvaṃ hi vyaktaṃ nitye nirāspadam // (TS 1796)**  
**skandhādivyatiriktasya kāritrasyopavarṇane<sup>(106)</sup> /**  
**svasiddhāntavirodhaś ca durnivāraḥ prasajyate // (TS 1797)**

**pūrvam** iti sthirabhāvaparīkṣāyām. sarvasya ca saṃskṛtasyānityatvābhyupagamāt  
**saṃskṛtatvaṃ nitye** na sambhavaṭīti spaṣṭam evāvasīyate<sup>(107)</sup>. kiṃ **ca skandhadhātva-**  
 āyatana<sup>(108)</sup>-**vyatiriktasya kāritrasyopavarṇane siddhāntavirodhaḥ**, tathā hi bhagavatoktam:

sarvaṃ sarvam iti brāhmaṇa yaduta pañcaskandhāḥ, \* dvādaśāyatanāni, aṣṭādaśa ca J193a4  
 dhātava<sup>(109)(a)</sup>

iti. (TSP ad TS 1796–1797)

(Pā33b5; D65b6; P79b3)

\* **ananyatve 'pi kāritram dharmād avyati rekataḥ /** J91a5  
**svarūpam iva dharmasya prasaktaṃ sārva kālīkam<sup>(110)</sup> // (TS 1798)**  
**tataś cādhvavibhāgo 'yaṃ tadvaśān na prakalpyate<sup>(111)</sup> /**  
**na hi tasya cyutiḥ prāptir aprāpti-*\*r* vā vibhāgataḥ // (TS 1799)** J91a6

(K508,1; S619,10; Pā148a4; D83b2; P118a8) athānanyat **kāritram** abhyupagamya, tadā  
 dharmasvarūpavat tadavyati rekāt tad api **sārva kālīkam** prāpnoti. **tataś ca** kāritrāt pracyuto 'tītaḥ,

<sup>(103)</sup> etat JKS : itad Pā

<sup>(104)</sup> nityatāsaktiḥ J, Pā (cf. TS 1795a) : nityatā śaktiḥ KS (cf. rtag pa dang nus pa dang T) : nityasya śaktiḥ Schayer 40

<sup>(105)</sup> rtag pa dang nus pa dang rgyu nyid dang 'dus byas nyid la sogs pa'i T for nityatāsaktiḥ, hetutvasaṃskṛtatvādes

<sup>(106)</sup> kāritrasyopavarṇane JK, Pā, TSP : kāritrasyopavarṇanam S (cf. byed pa ru ni rjod byed pa T)

<sup>(107)</sup> avasīyate JKS : avasāyate Pā

<sup>(108)</sup> skandhadhātva-āyatana- J, Pā (phung po dang khams dang skye mched las T) : skandhāyatana- KS

<sup>(109)</sup> aṣṭādaśa ca dhātava S : aṣṭādaśadhātava J : aṣṭādaśacā(ścā?)bhava K : aṣṭādaśacābhava Pā

<sup>(110)</sup> sārva kālīkam KS : sarva kālīkam J, Pā

<sup>(111)</sup> rtag mi 'gyur T for na prakalpyate

<sup>(a)</sup> Cf. 『雜阿含經第十三』 Taisho no. 99, vol. 2, 91a27f.: 佛告婆羅門。一切者謂十二入處。(AKBh 301,7f.: sarvam astīti bhrāhmaṇa yāvad eva dvādaśāyatanānīti.)

See also 秋本・本庄 [1978: 104], Pāsādika[1986: 99].

tatprāpto vartamānas tadaprāpto 'nāgata iti kāritraśādh<sup>(112)</sup> ayam adhvavibhāgo<sup>(113)</sup> na syāt, yato 'sya kārītrasya yadi vibhāgena cyutiprāptyaprāptayaḥ<sup>(114)</sup> syuḥ, tadā syād ayam adhvavi-  
J193a5 \*bhāgaḥ, na ca tāni vibhāgena sambhavanti, sadāvasthitaikarūpasya vibhāgābhāvāt. (TSP ad TS 1798–1799)

(Pā33b6; D65b7; P79b4)

**kārītrāvyatirekādhā vā dharmāḥ kārītravad bhavet /  
pūrvāparavyavacchinnamādhyaṃtrakaśattvavān<sup>(115)</sup> // (TS 1800)**

(K508,8; S619,16; Pā148a7; D83b4; P118b3) kiṃ ca kārītrād avyatiriktatvād dharmo 'pi pūrvāparakoṭīśūnyasattāyogī prāpnoti kārītravat. pūrvāparavyavacchinnam pūrvāparakoṭīśūnyam, mādhyaṃtrakaśattvavān ca tat śattvam<sup>(116)</sup> ceti vighrahaḥ. tad asyāstīti tadvān. (TSP ad TS 1800)

(K508,11; S619,19; Pā148a8; D83b5; P118b4) kārītram ityādinā parasparaviruddhābhy-  
J193a6 upagamodbhāvanenopaha-\*sati<sup>(117)</sup>.

(Pā33b6; D66a1; P79b5)

J191b1 **kā-\*rītram sarvadā<sup>(118)</sup> nāstī sadā dharmāś ca<sup>(119)</sup> varṇyate /  
dharmān nānyac ca kārītram vyaktam devaiceṣṭitam // (TS 1801)<sup>(a)</sup>**

**kārītrāntarasāpekṣā tatrāpy adhvasthītir yadi /**

J191b2 **tulyaḥ paryanuyogo 'yam nanu sarvatra \* dhāvati // (TS 1802)**

evam tarhi rūpādidharmo na sadāstīti prasaktam, kārītrād avyatiriktatvād ity āha: **sadā dharmāś ceti.** evam api dharmād anyat kārītram prasajyata ity āha: **dharmān nānyac ca kārītram. devā** īśvarādayaḥ, te hi yuktāyuktam anālocya svāntanryeṇaiva<sup>(120)</sup> vartanta<sup>(121)</sup> itī teṣāṃ yathā

<sup>(112)</sup> kārītravaśād KS : kārītravaśād J, Pā

<sup>(113)</sup> dus la sogs pa'i rnam par dbye ba T for adhvavibhāgo

<sup>(114)</sup> cyutiprāptyaprāptayaḥ JS (zhig pa dang thob pa dang ma thob pa dag T) : yadi prāptyaprāptayaḥ K : corrupted Pā

<sup>(115)</sup> -sattvavān JS, Pā (cf. yod pa can T) : -sarvavān K, Schayer

<sup>(116)</sup> śattvam Suganuma (yod pa yang yin T, cf. -sattvavān TS) : sarvam KS, Pā : śattvam (?) J

<sup>(117)</sup> -udbhāvanenopahasati JKS : -udbhāvanenopahasati Pā

<sup>(118)</sup> rgyun du T for sarvadā

<sup>(119)</sup> dharmāś ca (cf. chos ni rtag tu'ang yod par brjod T, bhāvo nityaś ca neṣyate AKBh) K, TSP : dharmas tu JS, Pā

<sup>(120)</sup> svāntanryeṇaiva KS, Pā : svāntanryeṇa J (cf. rang dbang du T)

<sup>(121)</sup> vartanta JKS : vartata Pā

<sup>(a)</sup> Cf. AKBh 298,20–23: āha khalv api:

svabhāvaḥ sarvadā cāstī bhāvo nityaś ca neṣyate /

na ca svabhāvād bhāvo 'nyo vyaktam īśvaraceṣṭitam //

**ceṣṭitam**<sup>(122)</sup> yuktinira-**\*pekṣam**<sup>(123)</sup> svāntryeṇa pravṛttiḥ, tadvad etad iti yāvat. (TSP ad TS 1801) J193a7

kiṃ ca yadi kārītrasya<sup>(124)</sup> kārītram antareṇa<sup>(125)</sup> anāgatādītvam iṣyate, na tarhi vak-tavyam adhvānaḥ<sup>(126)</sup> kārītreṇa vyavasthitā iti, vyabhicārāt. yathā kārītrasya \* svarūpa-sattāpekṣayānāgatādītvam vyavasthāpyate, evaṃ bhāvānām apy anāgatādītvam bhaviṣyatīti kiṃ kārītrakalpanayā.<sup>(a)</sup> atha mā bhūd vyabhicāradoṣa iti<sup>(127)</sup> kārītrasyāpi kārītram abhyupagamyate, tadā **tatrāpi** vyatirekādicintayā **tulyaḥ paryanuyogaḥ**, anavasthādoṣaś<sup>(b)</sup> ca. (TSP ad 1802) J193b1

(K508,25; S620,11; Pā148a13; D84a2; P119a2) yad uktam ananyatve 'pi kārītram sārva-kālikam prāpnoti dharmasvarūpavad aviśeṣād<sup>(c)</sup> ity \* atra bhadantasamḡhabhadra<sup>(128)</sup> āha<sup>(129)</sup>. J193b2

(Pā33b8; D66a2; P79b6)

**svarūpāvyatirikto**<sup>(130)</sup> **'pi drṣṭaḥ sapratighatvavat /**  
**viśeṣaś ced idaṃ naiva prakṛtasyopakāra-kam // (TS 1803)**  
**na hi sapratighatvādīḥ padārthasyānugāmināḥ /**  
**kādācitko mata-**\*ḥ** kaścid bhāvasyaiva tathodbhavāt**<sup>(131)</sup> // (TS 1804) J191b3

(122) 'dod pa ji lta ba bzhin du T for yathā ceṣṭitam

(123) rigs pa dang mi rigs pas lta bar mi byed de T : yuktinirapekṣam

(124) n.e. T

(125) kārītram antareṇa KS (cf. bya ba gzhan med par AKBhT) : kārītratvam antareṇa J, Pā bya ba gzhan gyis T for kārītram antareṇa

(126) adhvānaḥ JKS : adhvātaḥ Pā

(127) 'khrul pa'i skyon du 'gyur na mi rung ngo snyam pas T for mā bhūd vyabhicāradoṣa iti

(128) -samḡhabhadra em. (Frauwallner[1973: 107], cf. 'dus bzang T) : -sahantabhadra JK, Pā : -samḡhatabhadra S

(129) āha JK, Pā (smra pa T) : āha svarūpād ityādi S

(130) svarūpāvyatirikto J, Pā, TSP (rang gi ngo bo tha mi dad T) : svarūpād vyatirikto KS

(131) tathā n.e. T, brjod phyir T for tathā

(a) Cf. AKBhT D139a7–b2; P275b1–3; 秋本 [1995: 182,5–9]: gal te bya ba la bya ba gzhan med par ma 'ongs pa la sogs pa nyid du 'dod na / de lta na bya bas dus rnam par gzhag pa zhes brjod par mi bya ste 'khrul pa'i phyir ro // ji lta bya ba ni ma 'ongs pa la sogs pa nyid kyi rang gi ngo bo 'i rgyud la bltos nas rnam par 'jog pas dngos po rnam kyang de lta ma 'ongs pa la sogs par 'gyur te / bya ba btags pas ci zhes bya ba ...

(b) Cf. AKBhT D139b2f.; P275b3f.; 秋本 [1995: 182,9–11]: ji ste 'khrul pa'i skyon du 'gyur du 'ong bas bya ba la yang bya ba gzhan 'dod na ni / de lta na yang thug pa med par thal bar 'gyur te / Cf. also AKVy 472,4–6: yady asty anavasthāprasaṅgaḥ. na ced astī, athānāgatādītvam kārītrasya svarūpa-sattāpekṣayaivaṃ bhāvānām apy anāgatādītvam bhaviṣyati. kiṃ kārītrakalpanayā.

(c) Cf. TSP 619,10f. ad TS 1798: athānanyat kārītram abhyupagamyate, tadā dharmasvarūpavat tadavyatirekāt tad api sārva-kālikam prāpnoti.

**svarūpāvyatirikto**<sup>(132)</sup> 'pi viṣeṣako dharmo **drṣṭaḥ**, yathā sapratighatvādiḥ pṛthivyādīnām. te hi<sup>(133)</sup> padārthatvenāviśiṣṭā<sup>(134)</sup> api sapratighā apratighāḥ, sanidarśanā anidarśanā iti svarūpāvyatiriktair<sup>(135)</sup> dharmair viśiṣṭāḥ pratiyante, tadvat kārītreṇāpi dharmā iti.

J193b3 tad etat prakṛtānupakāarakam. tathā hīdam atra prakṛtam: padārthāt kāri-*\*trasyābhede* 'bhyu-  
pagamyamāne saty ekasyaiva padārthasyātmabhūtakāritrasyāviśeṣāt tadvaśād ayam adhvavibhāgo  
nāvakalpata iti. pṛthivyādayas tu parasparam anyonyalakṣaṇabhedāsaṅgād bhinnā<sup>(136)</sup> iti yuktam,  
yat kecit sapratighā bhavanti, kecid apratighā eva yathā vedanādayaḥ, na tu ya evāpratighās ta  
J193b4 eva sapratighā iti<sup>(137)</sup>, yato na kaścīd eko 'nu-*\*gāmī* padārthātmāsti, pṛthivyādīnām yasya<sup>(138)</sup>  
**sapatighatvādi**<sup>(139)</sup>-dharmāḥ **kādācitko**<sup>(140)</sup> bhavet, kiṃ tarhi, **bhāvasya** niravayavasya **tathā**  
sajātīyavijātīyavyāvṛttasya**odbhava** iti na svarūpāvyatirikto dharmā ekasya<sup>(141)</sup> bhedako yuktaḥ.  
(TSP ad TS 1803–1804)

(K509,13; S620,24; Pā148b2; D84b1; P119b1) kathaṃ rūpasya sapatighatvam<sup>(142)</sup> iti vy-  
atirekīva<sup>(143)</sup> vyapadeśaḥ, yadi svarūpāvyatirikto dharmo bhedako na bhaved ity āha: **anākṣipte-**  
J193b5 *\*tyādi*.

(Pā33b9; D66a3; P79b8)

**anākṣiptānyabhedena bhāva eva tathocyate /**  
**tad rūpasyeti**<sup>(144)</sup> śābdena cetaso vāsanāpi ca // (TS 1805)

<sup>(132)</sup> svarūpāvyatirikto J, Pā (rang gi ngo bo las tha mi dad T) : svarūpād vyatirikto KS

<sup>(133)</sup> dper na T for hi

<sup>(134)</sup> don ji lta ba bzhi du khyad par med (*\*yathārthatvenāviśiṣṭā*) T for padārthatvenāviśiṣṭā

<sup>(135)</sup> svarūpāvyatiriktair J, Pā (rang gi ngo bo las tha mi dad pa'i T) : svarūpād vyatiriktair KS

<sup>(136)</sup> -bhedāsaṅgād bhinnā J : -bhedāsaṅgābhinnā KS, Pā

phan tshun rang gi mtshan nyid tha dad pa'i phyir tha dad pa yin no T for parasparam anyonyalakṣaṇabhedāsaṅgād bhinnā

<sup>(137)</sup> Cf. thogs pa dang bcas pa gang yin pa de kho na thogs pa med pa yin no zhes bya ba ma yin no T.

<sup>(138)</sup> yasya J, Pā : yat KS (cf. gang zhig T)

<sup>(139)</sup> sapatighatvādi- JKS : pratighatvādi- Pā

<sup>(140)</sup> kādācitko KS, Pā : ke?/kai?dācitko J

<sup>(141)</sup> ekasya KS, Pā : ekasye J

<sup>(142)</sup> sapatighatvam JKS : na pratighatvam Pā

<sup>(143)</sup> iva n.e. T

<sup>(144)</sup> tad rūpasyeti JK, Pā : sadrūpasyeti S

**anākṣiptānyabhedeneti**<sup>(145)</sup> **bhedāntarapratikṣeṇa**<sup>(146)</sup> ity arthaḥ. **tathocyata** iti vyatirekīva. **tad** iti sapratighatvam. **śabdeneti** rūpasya sapratighatvam<sup>(147)</sup> ity anena.<sup>(148)</sup> atra dṛṣṭāntam āha: **cetaso vāsanāpi ceti. api ceti** samudāyo nipāta ivārthe dṛṣṭavyaḥ. (TSP ad TS 1805)

(K509,21; S621,11; Pā148b5; D84b4; P119b4) punaḥ sa<sup>(149)</sup> evāha:

na kāritraṃ dharmād anyat, tadvyatirekeṇa svabhāvānupalabdheḥ. nāpi dharmamātram, \* svabhāvāstivte 'pi kadācid abhāvāt. na ca na viśeṣaḥ,<sup>(150)</sup> kāritrasya prāg abhāvāt, saṃtānavat. yathā<sup>(151)</sup> dharmanairantaryotpattiḥ saṃtāna ity ucyate, na cāsau dharmavyatiriktas tadavibhāgena gṛhyamāṇatvāt. na ca dharmamātram, ekakṣaṇasyāpi saṃtānavaprasaṅgāt. na ca nāsti, tat<sup>(152)</sup>-kārya-\*sadbhāvād<sup>(a)</sup>

J193b6

J193b7

iti. āha ca:

saṃtatikāryaṃ ceṣṭaṃ na vidyate sāpi saṃtatiḥ kācit /  
tadvad avagaccha yuktā kāritreṇādhvasamsiddhim<sup>(153)</sup> //(b)

ity atrāha: **tattvānyatvetyādi.**

<sup>(145)</sup> anākṣiptānyabhedeneti KS, Pā : anākṣiptanyabhedeneti J

<sup>(146)</sup> bhedāntarapratikṣeṇa KS, Pā (cf. khyad par gzhan spangs nas T) : bhedāntarāpratikṣeṇa Schayer

<sup>(147)</sup> sapratighatvam S : (sa)pratighatvam K : pratighatvam Pā

<sup>(148)</sup> Cf. de zhes bya ba ni thogs pa dang bcas pa nyid do // sgra zhes bya ba ni gzugs kyi thogs pa dang bcas pa zhes bya ba 'dis so // khyad par gzhan mi 'phen pa yis // zhes bya ba ni khyad par gzhan spangs nas zhes bya ba'i don to // de ltar brjod ces bya ba ni tha dad[mi dad D] pa lta bur ro //

<sup>(149)</sup> sa=samhatabhadraḥ J, Pā (marginal note)

<sup>(150)</sup> med pa yang ma yin te / khyad par yin pa'i phyir dang T for na ca na viśeṣaḥ

<sup>(151)</sup> yathā JK, Pā (dper na T) : tathā S

<sup>(152)</sup> tat- n.e. T

<sup>(153)</sup> -samsiddhim KS, Pā : -samsiddham J

<sup>(a)</sup> Cf. 『阿毘達磨順正理論 (卷第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 633a24-b2: 差別作用與所附體不可說異。如法相續如有爲法。剎那剎那無間而生名爲相續。此非異法無別體故亦非即法。勿一剎那有相續故不可說無。見於相續有所作故。如是現在差別作用。非異於法無別體故亦非即法。有有體時作用無故不可說無。作用起已能引果故。(See also 菅沼 [1964: 103, n.(19)])

Cf. also AKBhT D140a3-5; P276a7-b1; 秋本 [1995: 183,20-184,4]: yang de nyid la smras pa / bya ba chos las gzhan de las tha dad pa ma (D140a4) yin pa / rang bzhin med pa'i phyir chos tsam ma yin no // rang bzhin yod pa nyid la yang res 'ga' med pa'i phyir bya ba'i khyad par snga na med pa'i rgyud bzhin ma yin no // dper na bar med par skye ba'i chos la rgyud ces brjod pa bzhin no // 'di ni de'i las de las tha dad pa ma yin te de'i rang bzhin yin pa'i phyir ro // chos tsam gyi skad cig ma gcig kyang rgyud du thal ba ma yin pa'i phyir dang de'i bya ba yod pa'i phyir med pa ma yin no //

<sup>(b)</sup> Cf. 『阿毘達磨順正理論 (卷第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 633b3-4: 相續無異體 許別有所作 作用理亦然 故世義成立 (See also 菅沼 [1964: 103, n.(20)].)

Cf. also AKBhT D140a5f.; P276b2; 秋本 [1995: 184,4f.]: yang smras pa / rgyud kyi las dang tha snyad 'ga' zhig de ltar rdzas kyi sgo nas yod pa rtogs pa ma yin pas rigs pa'i byed pas dus rnam grub po zhe na /

(Pā33b10; D66a3; P79b8)

- J191b4 **tattvānyatvaprakārābhyām avācyam atha va-*\*rṇyate* /  
saṃtānādīva kārītram syād evaṃ sāmṣṛtaṃ nanu // (TS 1806)  
ataś ca kalpitatvena<sup>(154)</sup> tat kvacin nopayujyate /  
kārye saṃtativad yasmād vastv evārthakriyākṣamam // (TS 1807)**
- J191b5 **saṃnidhānaṃ ca tasyedaṃ bhāvi-*\*kaṃ* neti tatkr̥tam /  
adhvatrayavyavasthānaṃ tāttvikam nopapadyate // (TS 1808)**

(K510,7; S621,18; Pā148b8; D84b7; P119b8) **saṃtānādīvety ādiśabdena samūhādi-**  
J194a1 **parigrahaḥ. \* yathā saṃtānibhyas tattvānyatvenāvācyatvāt pudgala<sup>(155)</sup>-vat saṃtāno<sup>(156)</sup>  
niḥsvabhāvaḥ<sup>(157)(a)</sup>, tadvat kārītram api niḥsvabhāvaṃ<sup>(158)</sup> syāt. svabhāve hi sati tattvam  
anyatvaṃ vāvaśyambhāvi<sup>(159)</sup>.<sup>(b)</sup> (TSP ad TS 1806)**

tataś ca **tat** kārītram kalpitatvān **na kvacit kārye saṃtativad** upayujyeta. na hi kalpitasya<sup>(160)</sup>  
saṃtānasya<sup>(161)</sup> kvacit kārye 'sty upayogaḥ, tasya niḥsvabhāvatvāt, svabhāvapratibaddhatvāt  
J194a2 kāryodayasya. tasmād **vastv eva<sup>(162)</sup>** saṃtānisvabhāvam **artha-*\*kriyākṣamam***, na saṃtānaḥ  
kalpitaḥ. (TSP ad TS 1807)

tataś ca kārītrasya prajñaptisattvāt prāgvat<sup>(163)</sup> paścād api<sup>(c)</sup> na paramārthataḥ **saṃnidhānam**  
asfīti tadvaśād **adhvatrayavyavasthānam** api kalpitam eva syāt, **na** bhāvikam. (TSP ad TS 1808)

(154) rtag pa nyid kyis T for kalpitatvena

(155) =ātmā J, Pā (marginal note)

(156) gang zag dang rgyun T for pudgaravat saṃtāno

(157) niḥsvabhāvaḥ JKS : om. Pā

(158) tadvat kārītram api niḥsvabhāvaṃ J (de bzhin du bya ba yang rang bzhin med par 'gyur T) : tadvat kārītram api S :  
(tathā kārītram niḥsvabhāvaṃ) K : niḥsvabhāvaṃ Pā

(159) vāvaśyambhāvi JK (cf. gdon mi za bar ... 'gyur ba yin te T) : om. S : corrupted Pā

(160) kalpitasya KS, Pā : kalpitasye J

(161) rgyu ni T for saṃtānasya

(162) dngos po'i rang bzhin nyid T for vastv eva

(163) prāgvat S (snga ma bzhin du T) : prāganu K : prāgvanu J, Pā

(a) Cf. AKBhṬ D140a6f.; P276b3f.; 秋本 [1995: 184,7–9]: rgyud las ni yod pa nyid la sogs pa rnams de nyid dang  
gzhan nyid du brjod par bya ba ma yin pa'i phyir rang bzhin med de gang zag bzhin no //

(b) Cf. AKBhṬ D140a7; P276b4; 秋本 [1995: 184,9]: rang bzhin yod pa de nyid dang gzhan nyid du mthong ba ste ...

(c) Cf. AKBhṬ D140a7; P276b4f.; 秋本 [1995: 184,10f.]: bya ba yang btags par yod pa'i phyir sngon bzhin du phyis  
kyang de bzhin te /

## IV. 和訳と注解 (TS 1785–1808)

## 1. 三世実有論とその論拠

## 1.1. 総論・他学派説との類似性の指摘

(K503,20; S513,20) [TS 4<sup>(164)</sup>の中の]「[事物がその本性を保ったまま三世を] 移り行くということはない (asaṃkrānti)<sup>(165)</sup>」というこの[<縁起>という語に対する限定要素<sup>(166)</sup>]の妥当性を証明するために<sup>(167)</sup>, [シャーンタラクシタは]「hema」云々と述べる。

[反論:] [ジャイナ教徒やミーマーンサー学派によってのみならず一部の] 仏教徒たちによっても、金が[プレスレット等の金製品に] 随伴することとの類似性によって、[ある] 存在 (bhāva) は、[時が経過しても] 状態 (avasthā) のちがいが<sup>(168)</sup>をもつ [にすぎないとい

<sup>(164)</sup> TS 4 は、TS 6 に現れる<縁起 (pratītyasamutpāda)>という語に対する形容詞 (限定要素) の列挙によって構成されている。TS 4 の全体は以下の通りである。

TS 4: asaṃkrāntīm anādyantaṃ pratibimbādīsamnibham /  
sarvaprapañcasamdhohairmuktam agataṃ parañ //

「[<縁起>には、事物がその本性を保ったまま三世を] 移り行くということはなく、始めも終わりもない。[また<縁起>は、知の中に] 映し出された像等に類似しており、あらゆる戯論の集合を離れ、他の者たちによっては理解されることがない。」(渡辺 [1967: 16] も参照のこと。)

<sup>(165)</sup> TSP 17,16f.: na vidyate saṃkrāntir adhvasu sañcārah skandhādīnām yatreti vighrahaḥ.

また asaṃkrānti という語については、Schayer[1938: 29, n.1] の解説も参照のこと。

<sup>(166)</sup> Cf. TSP 670,16f.: pratibimbādīsamnibham (=TS 4b) ityetaṃpratītyasamutpādaviśeṣaṇasamarthanārtham idānīm vijñānavādām upakṣipati[upakṣiti S].

<sup>(167)</sup> TSP 序章では、「三時の考察」章著述の目的・背景について以下のように解説されている。

TSP 17,13–20: atha kim asaṃkrāntībhāvāḥ api skandhādayo 'dhvasv ajahatsvabhāvā eva vartante, yathāhur eke saṃkrāntivādīnāḥ sarvāstivādāḥ. naivam ity āha: saṃkrāntīm iti. yadi tu saṃkrāntiḥ syāt, tadā sarvātmanā sattvān na kiñcij janyam astīti pratītyasamutpādasyaivāyoga iti bhāvāḥ. na vidyate saṃkrāntir adhvasu sañcārah skandhādīnām yatreti vighrahaḥ. etac cābhīhitam bhavagatā yathoktam: (\*cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati, nirudhyamānaṃ na kvacit sañnicayaṃ gacchati hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati, bhūtvā ca pratīvigacchati) iti. ayaṃ ca traikālyaparīkṣopakṣepaḥ.

(\* Ce 『雜阿含經 (卷第十三)』 Taisho 99, vol. 2, 92c16–18: 諸比丘。眼生時無有來處。滅時無有去處。如是眼不實而生。生已盡滅。

Cf. AKBh 299,12–16: itthaṃ caitad evaṃ yat paramārthaśūnyatāyām uktaṃ bhagavatā: cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati, nirudhyamānaṃ na kvacit sañnicayaṃ gacchati hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati, bhūtvā ca pratīvigacchati. (cf. ADV 267,1–2; 267,6–7; 267,12; 268,5.)

また、Cf. 『仏説勝義空經』 Taisho 655, vol. 15, 807a1–3: 謂眼生時而無少法有所從來。又眼滅時亦無少法離散可去。諸必芻其眼無實離於實法。

秋本・本庄 [1978: 102], Honjo[1984: 78f.], Pāsādika[1986: 98] も参照のこと。なお、このパッセージは TSP 631,23f. にも引用されている。

「[問:] [諸々の事物はその本性を保ったまま過去・現在・未来を] 移り行くことと主張するある人々、[すなわち] 説一切有部の人々が述べるように、[五つの] 集合 (蘊) 等は、その本性が [別の本性と] 混じり合うということもなく、まさしく本性を捨てることなく [三] 世を通過して行くのではないか。[答:] そのようなことはない。従って、[シャーンタラクシタは] 『asaṃkrāntīm』と述べる。一方、もし [ある事物がその本性を保ったまま過去・現在・未来を] 移り行くことがあるなら、[そのような事物の本性は過去・現在・未来] 全てのものの本体として存在することから、いかなる生み出されうるものも存在しない。その場合、まさしく<縁起>が起こることから、妥当ではないということになる。[asaṃkrānti という語は、] あるもの (=縁起) において、[五蘊等が三世を本性を保ったまま] 移り行くこと (saṃkrānti)、すなわち [五] 蘊等が [三] 世を通過して行くこと (sañcāra) はない、というように分析される。このことは、世尊によって以下のように述べられた。『眼は生起するときどこから来るわけでもなく、滅するときどこかに集まることもない。従って、比丘たちよ、眼は今まで存在しなかったが今存在し、存在し終わって消滅する。』そして以上が『三時の考察』[章] に対する [間接的な] 言及である。」(訳については、渡辺 [1967: 20] も参照のこと。)

<sup>(168)</sup> ここに見られる「avasthābheda (状態のちがいが)」は、説一切有部の四大論師の一人ヴァスミトラの主張にも

う理由で、過去・現在・未来という] 三つの時に随伴して存在することが認められているではないか。(TS 1785)

「しかしながら、いかなるものの存続もない (TS 1782d)」<sup>(169)</sup>ということに対して、以下のような反論がある。[反論:] [ジャイナ教徒やミーマーンサ学派によつてのみならず] ダルマト

見られる「avasthābheda (境位のちがひ)」と表現は同一であるものの、その意味する内容は異なる。ここでの「avasthābheda (状態のちがひ)」とはむしろ、四大論師の主張に見られる様態 (bhāva) のちがひ・特徴 (lakṣaṇa) のちがひ・境位 (avasthā) のちがひ・関係性によるちがひ (anyathānyathika) を総称したものと考えられる。カマラシーラも、ここで用いられている金の比喩に関して「[TS 1786 および TS 1787c に見られる] 金の比喩によつては、[説一切有部の] 定説に対する全般的な言及がなされているのであって、[そこでは] ダルマトラータの見解のみが意図されているわけではない。(TSP 615,21f.: hemadrṣṭāntena tu siddhāntopakṣepamātram kṛtam, na tu dharmatṛatadarśanam evābhimatam.)」と説明している。

<sup>(169)</sup> カマラシーラが参照を指示する TS 1782d を含む箇所は、シャーンタラクシタが対論者の主張を批判する部分に相当するが、その批判の対象となっているのは直前の章(「蓋然論の考察 [Syādvādapariṅkā]」章)の TS 1776-1778 である。これら 3 つの偈に見られる前主張はカマラシーラによつてミーマーンサ学派のクマーリラに帰せられており、Ślokavārtika にほぼ同じ記述を見出すことができる。まずは TS 1776-1778 の内容を確認しておきたい。

TS 1776: vardhamānakabhaṅgena(\*) rucakaḥ kriyate yadā /  
tadā pūrvārthinaḥ śokaḥ prītiś cāpy uttarārthinaḥ // (= ŚV [Vanavāda] 21)

(\*) -bhange ca ŚV

「もし [金の] 皿が壊されることによつて [金の] 首飾りが作られたなら、前者 (=金の皿) を求める者は悲しみ、後者 (=金の首飾り) を求める者は喜ぶであろう。」

TS 1777: hemārthinaḥ tu mādhyasthyaṃ tasmād vastu tryātmakam /  
notpādasthītibhaṅgānām abhāve syān matitrayam // (= ŚV [Vanavāda] 22)

Cf. ĀM 59, PVSVT 333,9f., DMP 81,10f., HBTĀ 369,19f. (Shiga[2013: 33 with n.55] も参照のこと)

「しかし金 [そのもの] を求める者は [それらに] 中立の態度をとる。従つて、実在は三つの性質をもつ。もし生起と存続と消滅がなければ、三つの観念 (=悲しみ・喜び・中立的態度) もないであろう。」

TS 1778: na nāśena vinā śoko notpādēna vinā sukham /  
sthītyā vinā na mādhyasthyaṃ tena sāmānyanīyatā // (=ŚV [Vanavāda] 23)

DMP 81,12f., PVSVT 333,11f., HBTĀ 369,21f. にも類似の偈 (d 句が tasmād vastu trayātmakam となっている) が見られる。(Shiga[2013: 33 with n.56] も参照のこと)

「消滅がなければ悲しみはなく、生起がなければ楽しみはない。そして存続がなければ中立的態度はない。そのこと (=中立の態度が存続と不可離関係にあること) によつて、[金という] 普遍は恒常なものである。」

上記 TS 1776-1778 に対するシャーンタラクシタの批判は以下の通りである。

TS 1779: ity etad api no yuktam asamānāśrayatvataḥ(\*) /  
utpādasthītibhaṅgānām ekārthāśrayatā na hi //

(\*) asamānāśrayatvataḥ JS (cf. rten ni mi mtshungs nyid kyi phyir) : asamānyāśrayatvataḥ K

「以上のことはまた正しくない。その基体が同じではないからである。すなわち、生起と存続と消滅は同一の事物を基体としていない、ということである。」

TS 1780: samānakālatāprāpṭeḥ parasparavirodhinām /  
idaṃ tu kṣaṇabhaṅgitve satī sarvam anākulam //

「相互に矛盾した [これら 3 つの] ものが同時 [に起こること] になってしまうからである。しかしながらこれら全てのことは、[その基体としての事物が] 刹那的に消滅するものであれば混乱を招くことはない。」

TS 1781: vardhamānakabhāvasya kaladhautātmanaḥ svataḥ(\*\*) /  
ananvaye vināśe hi kasyacic chokasambhavaḥ //

(\*\*) svataḥ J, TSP, 若原 [1996: 82] (cf. rang bzhin las T) : katham KS

「このものすなわち、金をそれ自身の性質とする [金の] 皿という存在物が、自ずから、持続することなく消滅するとき、[それを求める] ある者には悲しみが生じる。」

TS 1782: sarvathāpūrvārūpasya(\*\*\*) rucakasya tadātmanaḥ /  
janmany utpadyate prītir nāvathānam tu kasyacit //

(\*\*\*) sarvathāpūrvārūpasya TSP/若原 [1996: 82] (cf. rnam kun sngon ni med ngo bo'i T) : sarvathā pūrvārūpasya KS

「あらゆる点で以前にはなかった性質をもち、それ (=金) をそれ自身の性質とする首飾りが生起するとき、[それを求めるある者には] 喜びが生じる。しかしながら、[金をそれ自身の本質とするような] いかなるものの存続もない。」

上記 TS 1776-1782 の訳については、若原 [1996: 82f.] も参照のこと。

ラータをはじめとする [一部の] 仏教徒たちによっても、金が [種々の金製品に] 随伴することとの類似性によって<sup>(170)</sup>、[ある] 存在は、[時の経過に応じてその] 状態 (avasthā) が異なる [にすぎない] という理由で [過去・現在・未来という] 三つの時において存続すると認められている。そうである以上、どうして「しかしながら、いかなるものの存続もない (TS 1782d)」と述べられ [なければならなかつ] たのか。 (TSP ad TS 1785)

## 1.2. 四大論師の主張の紹介

(K503,26; S614,7) [シャーンタラクシタは] まさしくこのことを [本章] 第二番目の偈によって示す。

ちょうど金が、[時の経過に応じて] 状態のちがいをもつとしても色を失うことはないように、この存在は [三] 世 (adhvan) において実体性を失うことはない。 (TS 1786)

### 1.2.1. ダルマトラータ説

彼ら (=一部の仏教徒=説一切有部の人々) のうち、尊者ダルマトラータ (Dharmatrāta, 法救)<sup>(171)</sup> は [三世の区別は] < 状態 (bhāva) > のちがいを [による] と主張する者 (bhāvānyathāvādin) である。彼は [以下のように] 述べたと伝えられる。「ある存在要素 (dharma) が [三] 世を通過して行くとき、ただその状態のみが変化するだけであって、実体 (dravya) が [変化するわけ] ではない」と。ちょうど金という実体に関して、プレスレット・腕輪・イヤリング等の名称の原因であるその性質 (guṇa) は変化するが、色が [変化することは] ないと同様に、存在要素は未来等の状態にもとづいて異なるものとなる。すなわち、存在要素が未来の状態を捨てることによって現在の状態を獲得し、現在の状態を捨てることによって過去の状態を [獲得するの] であって、[その] 実体は変化するわけではない<sup>(172)</sup>。実体は、[三世] 全てにおいて [存在する] が、それぞれにおいてその本性を] 逸脱することはないからである<sup>(173)</sup>。さもなければ、未来のものと現在のものと過去のものがかく別のもとなってしまうことになる。[問:] それでは、彼 (=状態によるちがいを主張する者=ダルマトラータ) によって認められる < 状態 (bhāva) >

<sup>(170)</sup> この部分に対応するチベット訳 (gser brtan pa 'ga' yang yod pa ma yin te / rjes su 'gro ba dang chos mtshungs pas ...) には混乱が見られる。gser (hema-に対応) と rjes su 'gro ba dang chos mtshungs pas ... (-anugamasādharmyeṇa に対応) の間に brtan pa 'ga' yang yod pa ma yin te / (nāvasthānam tu kasyacid [TS 1782d] に対応) が挿入されているが、原文に対応する句は存在しない。

<sup>(171)</sup> ダルマトラータをはじめとする有部の四大論師の説は、2-3 世紀頃に成立したとされる『阿毘達磨大毘婆沙論』(五百大羅漢等造, 玄奘訳, Taisho 1545, vol. 27, 396a13-b23) においてすでに確認される。四大論師については、平川 [1974: 186] を参照のこと。また四大論師の説は、校訂テキストの脚注において示した文献 (AKBh, ADV) 以外に、NAŚ 631a16-b5 にも見られる。

<sup>(172)</sup> AKBh における平行箇所 (AKBh 296,9-14) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 88], 小谷・本庄 [2007: 113], 江島 [1986: 11-14] を参照のこと。

<sup>(173)</sup> この部分の解釈は、AKBhT における平行箇所: dngos po dus rnam su 'jug pa ni rang bzhin 'khrul pa med pa'i phyir ro // 「実体は [三] 世を通過して行く [としても], [その] 本性を逸脱することはないからである」に従った。(秋本 [1993: 49] も参照のこと。)

とはいかなるものなのか。[答:] それは特定の性質 (guṇaviśeṣa) のことであり、それ (=特定の性質) にもとづいて、「[これは] 過去のもの [である]」等の名称や知識が生じ働くのである<sup>(174)</sup>。

### 1.2.2. ゴーシャカ説

(K504,13; S614,15) 尊者ゴーシャカ (Ghoṣaka, 妙音) は [三世の区別は] <特徴 (lakṣaṇa) >のちがいが [による] と主張する者 (lakṣaṇānyathāvādin) である。彼は [以下のように] 述べたと伝えられる。「ある存在要素が [三] 世を通過して行くとき、過去の上は過去の上の特徴と結びついているが、未来のもの・現在のものの二つの特徴と離れているわけではない。ちょうどある男性が、一人の女性を愛していながらその他 [の女性] にも無関心でないように。未来のものと現在のものもまた [過去のもの] と同様であると述べられるべきである」と。<sup>(175)</sup> 実に、彼 (=特徴によるちがいを主張する者=ゴーシャカ) の [三世に関わる] 言語適用 (vyavahāra) は、過去のもの等の特徴の、その働き (vṛtti) の獲得 [状況] に依拠している<sup>(176)</sup>。以上 [の点] が直前 [のダルマトラータ説] との差異である。

### 1.2.3. ヴァスミトラ説

(K504,17; S614,19) 尊者ヴァスミトラ (Vasumitra, 世友)<sup>(177)</sup> は、[三世の区別は] <境位 (avasthā)<sup>(178)</sup>>のちがいが [による] と主張する者 (avasthānyathāvādin) である。彼は [以下のように] 述べたと伝えられる。「ある存在要素が [三] 世を通過して行くとき、それぞれの境位に到達するとそれぞれ別のもので表示されるが、それは [ある境位とは] 別の境位にもとづいているのであって、実体にもとづいているわけではない。実体は三世全てにおいて区別され

<sup>(174)</sup> この箇所チベット訳 (gang gi 'das pa la sogs pa'i brjod pa dang shes pa 'jug pa des dngos po la yon tan gyi khyad par ci zhiḡ 'dod/) では、yatas 以降の部分が先行する tena と関係づけられており、問いと答えの形ではなく、一続きの文章 (問い) として理解されている。また AKBhT における平行箇所 (AKBhT D136a2f.; P271b2-4; 秋本 [1993: 58,9-12]) の訳等については、秋本 [1993: 49] を参照のこと。

<sup>(175)</sup> AKBh における平行箇所 (AKBh 296,15-18) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 88], 小谷・本庄 [2007: 113], 江島 [1986: 15] を参照のこと。

<sup>(176)</sup> Cf. AKVy 469,31f.: labhdavṛttinā hi lakṣaṇena yukto vyavasthāpyate. 「[ある存在要素が] その働きを獲得した特徴と結びついたとき、[その存在要素は現在のものとして] 立てられる。」また、AKBhT および AKVy における平行箇所 (AKBhT D136a5; P271b6; 秋本 [1993: 58,18], AKVy 469,25) の訳等については、秋本 [1993: 50], 小谷・本庄 [2007: 125] を参照のこと。

<sup>(177)</sup> Frauwallner [1973: 106] によると、境位のちがいによる三世の区分を説いたヴァスミトラと作用の有無による三世の区分を説いたヴァスミトラは同名異人とされるが、TSP および AKBh は同一人物が両方の説を説いたと見なしているようである (TSP 619,19-23, AKBh 297,8-13)。フラウワルナー氏が二人のヴァスミトラを想定する根拠は ADV の記述による。四大論師の説が言及される際には bhadanta-Vasumitra と呼ばれる (ADV 260,3) が、作用説が言及される直前の箇所では sthavira-Vasumitra と呼ばれている (ADV 260,14)。

<sup>(178)</sup> ヴァスミトラ説のキー概念である avasthā という語は、これまで「位 (玄奘: Taisho 1558, vol. 29, 104c14, 真諦: Taisho 1559, vol. 29, 258a13)」「位置 (秋本・本庄 [1978: 88])」「時間的分位 (太田 [1979: 58])」「段階 (小谷・本庄 [2007: 113])」「状態 (菅沼 [1964: 81])」「位態 (江島 [1986: 16])」等と様々に訳されてきた。ここでは「現在のものにする」とは「別の場所に引き入れることである (TSP 629,13: deśāntarākaraṣaṇam cet)」や「特定の場所との結びつきにもとづいて、数を表示する別の名称が生じる (TSP 614,24f.: sthānaviśeṣasambandhāt samkhyābhidyotakam samjñāntaram utpadyate. Cf. AKBhT D136b3f.; P272a5f.; 秋本 [1993: 59, 9f.], AKVy 470,11-13.)」といった表現に見られるように、説一切有部が時間を空間的に捉えようとしている点も考慮して、「境位」という訳語を採用した。

ないからである<sup>(179)</sup>。ちょうど [算盤の] 計算球 (mr̥gdudīkā)<sup>(180)</sup>が 1 の位のところに投げ入れられると『1』<sup>(181)</sup>、100 という位のところに [投げ入れられると]『100』、1000 位のところに [投げ入れられると]『1000』と言われるように<sup>(182)</sup>、ある存在 (bhāva) は、作用 (kāritra) が [働いている] 状態にあるとき<sup>(183)</sup> <現在のもの>であり、それ (=作用) を失ったとき <過去のもの>となり、それ (=作用) をまだ獲得していないときは <未来のもの>である」と。彼 (=境界によるちがいを主張する者=ヴァスミトラ) の [三世に関する] 言語適用 (vyavahāra) は、[三世] それぞれの境界 (vyavasthā) に依拠している。例えば [算盤の] 計算球の場合のように。というのも、それ (=計算球) の本性が変化するわけではなく、特定の場所との結びつきにもとづいて数を表示する [それぞれ] 別の名称が生じるからである。<sup>(184)</sup>

#### 1.2.4. ブッダデーヴァ説

(K504,23; S615,3) 尊者ブッダデーヴァ (Buddhadeva, 覺天) は、[三世の区別は、以前・以後のものとの] 関係性によるちがいが [によると主張する] 者 (anyathānyathika) である。彼は [以下のように] 述べたと伝えられる。「ある存在要素が [三] 世を通過して行くとき、[それは] 以前のものとの以後のものとの関係してそれぞれ別のものとして呼ばれる」と。[また]「ちょうど一人の女性が『母』と言われたり、『娘』と言われたりするよう<sup>(185)</sup>」と。彼 (=関係性によるちがいを主張する者=ブッダデーヴァ) の [三世に関する] 言語適用は以前のものとの以後のものに依拠している。以前のもののみがあって以後のものがないものが <未来のもの>と言われ、以前のものとの以後のものとの両方があるものが <現在のもの>と言われ、以後のもののみがあって以前のものがないものが <過去のもの>と言われる<sup>(186)</sup>。

以上が、様態 [のちがいが]・特徴 [のちがいが]・境界 [のちがいが]・[以前・以後のものとの] 関係性によるちがいと名付けられる四つの、< [三世] 全てが存在するという主張 (sarvāstivāda, 説一切有部説) >である<sup>(187)</sup>。

<sup>(179)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D136b1; P272a3; 秋本 [1993: 59,5f.] の訳等については、秋本 [1993: 50] を参照のこと。

<sup>(180)</sup> AKBh の対応箇所では「vartikā (筆, ブラシ, ランプの芯, 色)」となっており、AKVy 470,9 では「gulikā (球, 真珠)」と注釈されている。秋本・本庄 [1978: 97, n.(9)] も参照のこと。

<sup>(181)</sup> Cf. AKVy 470,9f.: **yathaikā gulikaikāṃke nikṣiptaikasthāne sthāpitaikam ity ucyate.**

<sup>(182)</sup> AKBh における平行箇所 (AKBh 296,19–21) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 88], 小谷・本庄 [2007: 113], 江島 [1986: 16] を参照のこと。

<sup>(183)</sup> チベット訳: byed pa'i gnas skabs na ... より、このように訳出した。

<sup>(184)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D136b3f.; P272a5f.; 秋本 [1993: 59,9f.] の訳等については、秋本 [1993: 50] を参照のこと。

<sup>(185)</sup> AKBh における平行箇所 (AKBh 297,1–3) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 89], 江島 [1986: 17], 本庄・小谷 [2007: 114] を参照のこと。

<sup>(186)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D136b5f.; P272a8–b1; 秋本 [1993: 60,1–3]) の訳等については、秋本 [1993: 51f.] を参照のこと。

<sup>(187)</sup> sarvāstivāda は「[三世] 全てが存在するという主張」の他、「[三世] 全てにおいて [存在要素の本性は] 存在するという主張」と訳すことも可能である。この点については、小谷・本庄 [2007: 141f., 注 (2)] を参照のこと。また AKBh における平行箇所 (AKBh 296,8 [=AK 5.26ab]; 297,3) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 88f.], 小谷・本庄 [2007: 113f.] を参照のこと。

## 1.3. 四大論師の各主張に対する総論的批判

(K504,27; S615,8) 以上 [四つの説] のうち、第一の [説](=ダルマトラータ説) は変容 (pariṇāma, 転変) を主張するものであることから、サーンキヤ学派の見解<sup>(188)</sup>と異ならない<sup>(189)</sup>。それ (=サーンキヤ学派の見解) の否定が、これ (=ダルマトラータ説) の [否定] でもあると見なされるべきである<sup>(190)</sup>。すなわち、変容は以前の本性を捨てることなく [起こるか]、[以前の本性を] 捨てることによって [起こるかの] いずれかであろう。もし [以前の本性を] 捨てることなく [変容が起こる] とすれば、[三] 世の混乱が起こることになる。あるいは [以前の本性を] 捨てることによって [変容が起こる] とすれば、[説一切有部の学説である] < [実体としての本性が] 常に存在すること >との矛盾が生じる<sup>(191)</sup>。

(K505,3; S615,12) 第二の論者 (=ゴーシャカ) にもまさしく同じ [三] 世の混乱がある。[三世] 全て [の存在要素] が [三世] 全ての特徴と結びつく [ことになる] からである。一方、[例として挙げられた] 男性は、[自分自身とは] 別のものである愛情が現実化すること (samudācāra) にもとづいて「[その女性を] 愛している」と言われ、[愛情を] 単に [潜在的に] 保持していること (samanvāgama) によって「[他の女性に対して] 無関心ではない」と言われている [にすぎない]<sup>(192)</sup>。しかしながら [例示される側の] 存在要素に関していえば、[存在要素の] 特徴の現実化や、獲得・保有 (prāpti, 得)<sup>(193)</sup>と呼ばれるような [存在要素の] 特徴の [潜在的] 保持は<sup>(194)</sup>存在しない。特徴が、その獲得・保有 [の場合] と同様に、[現実化と潜在的保持という二つのレベルで] 異なるものになってしまうからである。従って、実例 (男性と複数の女性の関係) と例示されるもの (存在要素とその特徴の関係) との間には類似性はない<sup>(195)</sup>。

(188) サーンキヤ学派による転変説は、AKBh 159,18–22 においても紹介され批判が加えられている。この箇所訳および解説等については、秋本 [1991: 97f.]、那須 [2011: 58–60] を参照のこと。また Schayer [1938: 31f. n.1] によると、サンガパドらは、ダルマトラータ説は決してサーンキヤ説と同じものではなく、むしろヴァスミトラの説に近いと主張しているという。(『阿毘達磨順正理論 (巻第五十二)』 Taisho 1562, vol. 29, 631b, 6–10)

(189) AKBh における平行箇所 (AKBh 297,4) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 89]、江島 [1986: 18]、小谷・本庄 [2007: 114] を参照のこと。

(190) AKBhT における平行箇所 (AKBhT D137a2f.; P272b6, 秋本 [1993: 14f.]) の訳等については、秋本 [1993: 51] を参照のこと。

(191) AKBhT における平行箇所 (AKBhT D137a4f.; P272b8–273a2; 秋本 [1993: 60,19–61,1]) の訳等については、秋本 [1993: 51f.] を参照のこと。

(192) AKBh における平行箇所 (AKBh 297,4–6) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 89]、江島 [1986: 19]、小谷・本庄 [2007: 114] を参照のこと。

(193) prāpti は五位七十五法のうちの一つにも数えられるが、AKBh では以下のように定義されている。AKBh 62,15–17: **prāptir lābhaḥ samanvayaḥ** (AK 2.36b) dvividhā hi **prāptir** aprāptavihīnasya ca lābhaḥ pratilabdhenā ca samanvāgamaḥ. viparyayād aprāptir iti siddham. 「獲得・保有とは、取得、保持である。(AK 2.36b) 実に、獲得は二種類である。[未だ] 獲得していないもの [、あるいはすでに] 捨て去ったものを取得することと、取得したものを保持することである。[それとは] 反対に、不獲得・不保有 (aprāpti) ということ [も] 確立される。」

(194) AKVy 470,2f. (śeṣāsu strīṣu rāgaprāptir evāsti, na samudācāra iti.) およびチベット訳 (mtshan nyid mngon du gyur pa'am / thob pa'i mtshan nyid kyi ldan pa yod pa ...) より、prāptilakṣaṇaḥ は lakṣaṇasamanvāgamaḥ のみにかかるかと理解した。

(195) AKBhT における平行箇所 (AKBhT D137b1f., P273a6, 秋本 [1993: 61,10f.]) の訳等については、秋本 [1993: 52] を参照のこと。

第三の[論]者(=ヴァスミトラ)は、作用による[三]世[それぞれ]の確立[を主張する]が、彼[の説]に対しては[後に]詳細な論駁が述べられるであろう。

第四の[論]者(=ブッダデーヴァ)についても、[その説に従えば三世の中の]ただ一つの世に三世があることになる。すなわち、過去世における以前と以後の瞬間は、それぞれ過去と未来となり、その中間の瞬間は現在となる[ことになる]<sup>(196)</sup>。これら[四つの説]に対する以上のような論駁の方向性(dūṣaṇadīś)は明白である。

(K505,9; S615,20) まさしく第三の[論]者(=ヴァスミトラ)[の説]を起点として、さらなる「三時の考察」が開始される。一方、[TS 1787に見られる]金の比喻によつては、[説一切有部の]定説に対する全般的な言及がなされているのであって、ダルマトラータの見解(dharmatrātadarśana)のみが意図されているわけではない。従つて、[シャーントラクシタは後に TS 1790cd において]

「この[三]世の区別は作用によつて規定される。」(TS 1790cd)

という[説一切有部の説]に言及するであろう。なお、作用による[三]世[それぞれ]の確立[を主張したの]はダルマトラータではなく、ヴァスミトラである。(TSP ad TS 1786)

#### 1.4. 三世実有論の5つの論拠: 理証(1)–(3)と経証(1)–(2)

さもなければ(=過去のものとして未来のものが存在しないとすると)、過去のものとして未生のものに関する知識は対象をもたないということになるだろう。またどうして、「認識は[眼と色かたちといった感覚器官と対象の]二者をよりどころとしている」と救護者[たるブッダ]によつて述べられたのであろうか。(TS 1787)

また、どうして存在性をもたない過去の業が<sup>(197)</sup>結果をもたらすことが認められようか。またどうしてヨーガ行者たちにとって、過去と未来のものに対する知識は区分されているのか。(TS 1788)

それ故、[推論式:] 過去および未来[の存在要素]は、実体[であること]が否定される対象ではない。[それらの存在は、それぞれ過去あるいは未来]世によつて包摂される物質的存在(rūpa)をはじめとする[五蘊]であることなどから<sup>(198)</sup>。ちょうど現在[の存在]のように。(TS 1789)

(K505,12; S615,24) そのこと(=三世の区別)に関して、もし過去および未来のものが存在しないとするならば、「[過去に]マハーサンマタ[王]がいた」「[未来に]転輪シャンカ[王]が現

<sup>(196)</sup> Cf. AKBh における平行箇所 (AKBh 297,6–8) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 89]、江島 [1986: 20]、小谷・本庄 [2007: 114] を参照のこと。

<sup>(197)</sup> Cf. 太田 [1979: 55]: 「過去の業が無自性ならば・・・」

<sup>(198)</sup> Cf. 太田 [1979: 55]: 「過去・未来の諸存在は実体を持たない対境ではない。それは(三)世に包摂された「色」等の存在であるから。」

れるであろう<sup>(199)</sup>といった過去のもの<sup>(199)</sup>と未生のものに関する認識はまさしく認識対象をもたないことになるだろう。それ故また、認識対象が存在しないことから、認識そのものが存在しないことになる、ということである<sup>(200)</sup>。というのもすなわち、認識とは[その対象としての]事物それぞれに応じた表象作用を本質とする (prativastuvijñāptyātmakam) ものであるからである<sup>(201)</sup>。そして知られるものが存在しなければ、どのようなものもこれ (= 認識) によって知られないことになる。その場合、認識そのものが存在しないことになるであろう<sup>(202)</sup>。

(K505,16; S616,6) さらにまた、世尊によって

「認識は二つのものに縁って生起する」

と、[また]

「二つのものとは何か。眼と色かたち、乃至、思考 (manas) と思考される事柄 (dharma) である」

と述べられた。また、過去のもの<sup>(199)</sup>と未来のものが存在しなければ、それらを認識対象とする認識が二つのもの (= 五官あるいは思考とそれぞれの対象) に縁って存在しないことになるであろう<sup>(203)</sup>。その場合、聖なる教えと矛盾することになる。

さらにまた、もしそれ (= 過去の業) が「存在性をもたない」すなわち存在性を欠くものであるならば、過去の業が結果を生み出すことはないであろう。結果が生起する時、< 応報をもた

<sup>(199)</sup> VN においても、「マハーサンマタ [王]」や「転輪シャンカ [王]」といった人物の名が、現在存在していない過去あるいは未来のもの<sup>(199)</sup>の例として挙げられている。Much[1991: 14, n.74f.]によると、マハーサンマタ王は釈迦族の王統の系譜の最初に位置する王の名で、転輪シャンカ王は、未来世において弥勒仏が現れる時に世界を統治している王であるとされる。VN における該当箇所は以下の通りである。

VN 6,2-6: asatsv api kathamcid atītānāgatādiṣu nānaikārthakriyākāriṣu vā artheṣu tadbhāvasthāpanāya nānaikātmābhāve 'pi nānaikarūpāṇāṃ vṛtteḥ, rājā mahāsammatāḥ prabhavo rājavaṃśasya, śāṅkhaś cakravartī mahāsammatanirmitasya yūpasya utthāpayitā ... 「ある方法で、それら (= あらゆる認識や言語表現) は [現在] 存在していない過去・未来等のもの<sup>(199)</sup>に関しても、あるいは多数もしくは単一の効果的作用をなす事物に関して、[それらの事物が] 多数もしくは単一の性質をもたないとしても、それらの [事物の] 性質を [仮に] 定立するため [であれば]、[それらは] 多数もしくは単一の形をとって現れるからである。例えば、『マハーサンマタ王は、王族の出身である』『転輪シャンカ [王] は、マハーサンマタ [王] によって作られた祭式用の支柱を [再び] 設立した人である』・・・というように。」(この部分の訳とマハーサンマタ王および転輪シャンカ王についての解説および詳細なリファレンスについては、Much[1991: 14 with n.74f.], 赤沼[1967: 388f.; 587]を参照のこと。)

<sup>(200)</sup> AKBh における平行箇所 (AKBh 295,18f.) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 87], 小谷・本庄 [2007: 112]を参照のこと。

<sup>(201)</sup> Cf. AKBh 11,6-8 (ad AK 1.16a): vijñānam prativijñāptih // (AK 1.16a) viṣayaṃ viṣayaṃ prati vijñaptir upalabdhir vijñānaskandha ity ucyate. 「認識とは、個別的表象作用である。(AK 1.16a) 対象ごとに表象すること、すなわち知覚することが認識の集合と呼ばれる。」

<sup>(202)</sup> AKBhT における平行箇所 (AKBhT D135b3f.; P271a2f.; 秋本 [1993: 57,12f.]) の訳等については、秋本 [1993: 49]を参照のこと。

<sup>(203)</sup> 経典からの引用を含む AKBh における平行箇所 (AKBh 295,14f.) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 87], 小谷・本庄 [2007: 111f.]を参照のこと。

らす原因 (vipākahetu, 異熟因)<sup>(204)</sup> が存在しない [ことになる] からである<sup>(205)</sup>。そして、存在しないものには結果を生み出す能力がない。非存在であることは、あらゆる能力を欠いていることを特徴とするからである。

さらにまた、「[かつて] マーンダートリ [という王]<sup>(206)</sup>がいた」や「[かつて] ブラフマダッタ (Brahmadatta)[という王]<sup>(207)</sup>がいた」、また「[未来に] 転輪シャンカ [王] と弥勒如来が現れるであろう」などの区別によって区分された、過去のもの等を対象とするヨーガ行者たちの認識はありえないことになる。というのも、存在しないものに区別はないからである。それ故、シュリーハルシャ [王]<sup>(208)</sup>等の過去および未来の存在は、[それらが] 実体 [であること] が否定されることをその性質とはしない。[それらの存在は、過去世あるいは未来] 世によって包摂される物質的存在等として教示されているからである。ちょうど現在の [存在] のように。というのも、世尊によって、

「比丘たちよ、もし過去の物質的存在がなかったら、多聞の聖なる弟子は、過去の物質的存在に対して関心を捨てることはなかったであろう。むしろ過去の物質的存在が存在するから [こそ]、多聞の聖なる弟子は、過去の物質的存在に対して関心を捨てる [ことができる] のである<sup>(209)</sup>」

というように詳説されているからである。同様に、

「およそ過去の物質的存在や未来等の [物質的存在] 全てを集めた後に、[それらを総称して] 『物質的存在の集合 (色蘊)』と名づける<sup>(210)</sup>」

云々と説かれている。

<sup>(204)</sup> <異熟因>は、AKBhにおいて以下のように説明されている。AKBh 89,17 ad AK 2.54cd (vipākahetur aśubhāḥ kuśalās caiva sāsraḥ): akuśalāḥ kuśalāsāsravāś ca dharmā vipākahetuḥ, vipākadharmatvāt. 「悪しき [ダルマ] と煩惱を伴う善なるダルマが異熟因である。[それらには] 応報をもたらす性質があるからである。」

<sup>(205)</sup> AKBhにおける平行箇所 (AKBh 295,21–296,1) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 87], 小谷・本庄 [2007: 112] を参照のこと。

<sup>(206)</sup> マーンダートリ (Māndhātṛ) という王の名は、AKBh 119,7 において、湿生で生まれる人間の一例として言及されている。この王がなぜ湿生によって生まれたかについては AKVy に説明がある。(AKVy 265,20–22: upośadhasya kila rājña mūrḍhni piṭako jātaḥ. tasya vṛddher anvyāt paripākānvayāt paribhedānvayād dārako jātaḥ so 'yaṃ māndhāteti saṃsvedajo bhavati.) また、赤沼 [1967: 407f.] も参照のこと。

<sup>(207)</sup> ブラフマダッタ (Brahmadatta) という王の名も、やはり湿生によって人間が生まれる場合の例として AKVy に言及されている。(AKVy 265,24f.: brahmadattasya kila rājña urasi piṭako jātaḥ. tasya vṛddher anvyāt pūrvavad yāvad dārikā jāta. seyaṃ kapotamālinīti.) 赤沼 [1967: 104] も参照のこと。

<sup>(208)</sup> チベット語訳は、rgyal po dga' ba'i dpal (「ハルシャ・シュリー王」あるいは「吉祥なるハルシャ王」) となっているため、王の名の可能性が高いが、特定の人物の名を指しているかどうかは不明である。ここでは過去および未来のものとして挙げられているため、特定の人物ではなく、当時のインドにおける一般的な名前を挙げている可能性もある。

<sup>(209)</sup> この一節は、校訂テキストの脚注にも示した通り『雑阿含経』(Taisho 99, vol.2, 20a14–21) からの引用であると考えられるが、AKBhにも同様のものが引用されている。AKBhの当該箇所 (AKBh 295,9f.) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 86f.], 小谷・本庄 [2007: 111] を参照のこと。

<sup>(210)</sup> 校訂テキストの脚注にも示した通り、この一節も『雑阿含経』(Taisho 99, vol.2, 13b15–17) からの引用であると考えられるが、AKBhにも類似するパッセージが引用されている。AKBhの当該箇所 (AKBh 13,5f.) の訳については、櫻部 [1969: 172] を参照のこと。

(K505,26; S616,20) [TS 1789cd の *adhvasaṃgraharūpādibhāvādeḥ* という複合語のうち] 「*adhvasaṃgraha-*」 [という部分は], [過去世あるいは未来] 世による包摂がある [という所有複合語で, 次の *-rūpādi-* を修飾し, 全体としては] 「[過去あるいは未来] 世による包摂がなされる物質的存在等」と [分解される]。 [*-rūpādi-* の中の] 「*ādi*」 という語によって, 感受 (*vedanā*, 受) 等 [も] 包含される。それら (=過去・未来世による包摂がなされる物質的存在等) の 「*bhāva*」 とは, 物質的存在等であることということである。ここ (=複合語の中の *-bhāvādeḥ*) においても 「*ādi*」 という語 [が使用されているが, それ] によって, [過去および未来の存在は四聖諦のうちの] 苦と [苦の] 集合・[三法印のうちの] 無常なるもの・無我なるもの等として教示されているから, ということ [も] 把握される。(TSP ad TS 1786–1789)

## 2. 説一切有部による作用説とそれに対する批判

### 2.1. 説一切有部およびサンガバドラによる作用の定義

(K506,3; S616,23) [反論:] あるいは [以下のような反論] もあるかもしれない。「[存在要素の本性が] 虚空のように常に存在する [というならその] ことから, その場合いかにして過去のもの等 [それぞれ] の確立があるのか」というので, [説一切有部は] 「*na caivam*」 云々と答える。

しかしながらここでは (=三世実有論においては) そのように, 「この [三] 世の区別はどのようにして [なされるの] か」と考えるべきではない。この [三] 世の区分は作用によって規定されるからである<sup>(211)</sup>。(TS 1790)

[すなわち] 作用 [を獲得した] 状態にある<sup>(212)</sup>ものが「現在のもの」と呼ばれる。作用を失ったものが「過去のもの」[と呼ばれ], それ (=作用) を [未だ] 獲得していないものが「未来のもの」[と呼ばれる]。(TS 1791)

また諸々の存在要素の作用とは, <結果を引き寄せること> (*phalākṣepa*) であって, [作用は結果を] 生み出すものではない。また諸々の過去 [の存在要素] には <結果を] 引き寄せること>がない。これ故, [過去のものに] 作用はありえない。(TS 1792)

[説一切有部:] 「『この三世の区別はどのようにしてなされるのか』と考えるべきではない」(TS 1790ab) というのは, ] 以下のような理由による<sup>(213)</sup>。[すなわち, ] 作用を獲得したものが「現在のもの」と呼ばれ, 作用が静止したものが「過去のもの」[と呼ばれ], 作用を未だ獲得していないものが「未来のもの」[と呼ばれる] ことから, [三] 世 [のそれぞれ] は作用によって確立されるからである。

<sup>(211)</sup> Cf. 太田 [1979: 55]: 「この三世の区分は「作用」(*kāritra*) によると考えられる。」

<sup>(212)</sup> チベット訳: *byed pa la ni gang gnas pa* より, このように訳出した。Cf. Schayer [1938: 35]: “What is just manifesting its *kāritra* is called present, ...” また cf. 太田 [1979: 55]: 「「作用」を起しているものが現在といわれ・・・」

<sup>(213)</sup> この冒頭の *yataḥ* は, TS 1790d 句の *yat* を注釈したものと考えられる。対応する TS のチベット語訳も *gang phyir* となっている。

[問:] それでは、ここではどのような作用が意図されているのか。[説一切有部:] 見ることを特徴とする働き (vyāpāra)[が作用] である。例えば、眼等の五つ [の感覚器官] には見ることを等 [の作用]<sup>(214)</sup>がある。なぜなら<sup>(215)</sup>、眼は見る、耳は聞く、鼻は嗅ぐ、舌は味わう等 [の作用をなす] からである<sup>(216)</sup>。[諸々の感覚器官による] 認識はまた、認識するという [作用をなす] ことから認識主体である [が、認識主体であることと認識するという作用自体の間にちがいはない<sup>(217)</sup>。同様に、] 色かたち等が [それぞれに対応する] 感覚器官の対象領域であること [もまた作用である<sup>(218)</sup>]<sup>(219)</sup><sup>(220)</sup>。[反論 (経量部):] もしそうである場合、現在の、認識作用に参加していない (tatsabhāgasya, 彼同分)<sup>(221)</sup> 眼が睡眠等の状態にあるとき、[その眼に] 作用は存在しないので [その眼は] 現在のものではないということになるだろう<sup>(222)</sup>。

(K506,16, S617,14) [説一切有部:] あるいは作用は、<結果を与えることと受け取ること (phaladānagrahaṇa)>を特徴とする。例えば、眼 [という原因] には、[眼と] <共に生じる [原

<sup>(214)</sup> 秋本・本庄 [1978: 97, n.15f.] によると、サンガパドらは『順正理論』において darśana(視覚機能)を作用に含めていないとされる。

<sup>(215)</sup> Schayer[1938] は、yataḥを「そのこと (kāritra) にもとづいて」と解釈しているようである。Schayer[1938: 35f.]: “it is [the special potency] by which the eye is seeing, the ear is hearing, the nose is smelling, the tongue is tasting etc.; it is [further the special potency] by which consciousness (vijñāna) is active as cognizing; [and finally] it is [the special potency] by which visual forms (rūpa) etc. are made objects of the corresponding sense-organs (svendriyagocaratva).”

<sup>(216)</sup> AKBh 31,15f. にも類似する記述が存在するが、そこでは「カシュミールの毘婆沙師たち (Kāsmīravaibhāṣika)」による定説とされている。

<sup>(217)</sup> Cf. AKBh 31,4f.: yadi hi vijñānaṃ vijñātīṭṣyate, na ca tatra kartṛkriyābhedah. evam atrāpi. 「というのも、もし『認識が認識する』ということが認められるとすれば、その場合、[認識することという作用を] なす主体と作用 [自体] の間にはちがいはない。[「眼が見る」という] この場合も同様である。」(櫻部 [1969: 221] も参照のこと。)

<sup>(218)</sup> AKVy における平行箇所 (AKVy 7f.: rūpādīnām api svendriyagocaratvaṃ kāritram) より、このように補った。

<sup>(219)</sup> 下記の AKVy の記述からも、ここでは十八界の三分類に則して、kāritra の三つの側面 (要素) が述べられていると考えられる。三つの側面とはすなわち、(1) 見ることを眼等の感覚器官によってなされること (認識のよりどころあるいは<根>としての側面)、(2) 諸々の感覚器官によって生じる認識は、認識する主体でもあること (認識主体あるいは<界>としての側面)、(3) 色かたち等が六つの感覚器官 (六根) それぞれの対象であること (認識対象あるいは<処>としての側面) である。AKVy 76,34–77,2: kāritram cakṣurādīnām darśanādi, vijñānadhātūnām vijñātṛtvam, viśayadhātūnām tadviśayālabhanabhāvaḥ.

<sup>(220)</sup> AKBhT における、ここまでの記述との平行箇所 (AKBhT 137b2f.; P273a7f.; 秋本 [1993: 61,15f.]) の訳等については、秋本 [1993: 52f.] を参照のこと。

<sup>(221)</sup> AKVy 471,9f.: yad dhi kāritralakṣaṇam svakarma na karoti tat tatsabhāgaḥ. tasya ca nāsti kāritram darśanalakṣaṇam より、このように訳出した。<彼同分>については、AK および AKBh において以下のような説明がある。AKBh 28,1: yo na svakarmakṛt // (AK 1.39d) uktaṃ bhavati. yaḥ svakarmakṛt sa sabhāga iti. tatra yena cakṣuṣā rūpāny apāśyat paśyati drakṣyati vā, tad ucyate sabhāgaṃ cakṣuḥ. 「[彼同分とは] 自身の行為をなすことがないものである。(AK 1.39d) [このことによって] 行為に参加するもの (sabhāga) は [反対に] 自身の行為をなすものであると述べられたことになる。そのうち、[もしある人が自身の] 眼によって色かたちをすで見たと、現に見ている、やがて見るであろう [という状態にある] ならば、その眼は『同分の眼』と呼ばれる。」(櫻部 [1969: 213], 秋本・本庄 [1978: 97, n.(15)f.] も参照のこと。)

<sup>(222)</sup> AKBh における関連箇所 (AKBh 297,15) の訳等については、秋本・本庄 [1978: 89f. with n.15], 小谷・本庄 [2007: 115] を参照のこと。また、AKBhT における関連箇所 (AKBhT D137b2f.; P273a7f.; 秋本 [1993: 61,15f.]) の訳等については、秋本 [1993: 52f.] を参照のこと。

因](*sabhabhū[-hetu]*, 俱有 [因])<sup>(223)</sup>>である<生起 (*jāti*)<sup>(224)</sup>>等の諸々の存在要素がある [が, それらは同時に] <人間の行為の [ような] 結果 (*puṣākāraphala*, 土用果)<sup>(225)</sup>>で [も] ある。[さらに] 直後に生起する眼という感覚器官は, [直前の眼という原因]<sup>(226)</sup>にとつての] <人間の行為の [ような] 結果>である<sup>(227)</sup>[と同時に], <補助的な力による結果 (*adhipatiphala*, 増上果)<sup>(228)</sup>>であり, <流れ出る結果 (*niṣyandaphala*, 等流果)<sup>(229)</sup>>で [も] ある。眼はこれらの結果を生み出すことから [結果を] 与えるもの>であり, 原因の状態にあることから [結果を] 受け取るもの>である [ため], 「現在のもの」と言われる<sup>(230)</sup>。

(223) <俱有因>は, AK および AKBh において以下のように定義されている。AKBh 83,16f.: *sababhūr ye mithahphalāḥ* / (AK 2.50b) *mithah* pāraṃparyeṇa ye dharmāḥ parasparaphalās te parasparah *sababhūhetuh*. 「俱有 [因] は互いに結果となるものである。(AK 2.50b) 「互いに」とは相互にということである。諸々の存在要素が相互に [土用] 果である場合, それらは相互に俱有因である。」

(224) AKBh 75,19: *jātiḥ tam dharmam janayati*. 「生起は, その [形成された] 存在要素 (有為法) を生じさせる。」

(225) <土用果>は, AK および AKBh において以下のように説明されている。AKBh 95,1-4: *pauruṣam dvayoḥ* // (AK 2.56d') *sababhūsamprayuktakahetoḥ puṣākāraphalam. puṣabhāvāvyatirekāt puṣākārah puṣa eva. tasya phalam pauruṣam. ko 'yam puṣākāro nāma. yasya dharmasya yat kārītram, puṣākāra iva hi puṣākārah*. 「俱有因と相応因の二つの原因には, <人間の行為 [のような] 結果 (土用果)>がある。(AK 2.56d') 俱有 [因] と相応 [因] の二つの原因には, <人間の行為 [のような] 結果 (土用果)>がある。人間の行為とは人間 [そのもの] に他ならない。[人間の行為は] 人間であることを越え [て別に存在す] ることはないからである。その結果が, [AK 2.56d'] において述べられるところの『人による [かのような結果]』である。この『人間の行為』というのは一体何か。あるダルマが作用を有するとき, [その作用がそのダルマの土用である]。というも, 人間の行為 [と呼ばれるの] は, 人間の行為のようである [からである]。」(この箇所の訳等については, 櫻部 [1967: 393], [1969: 384] も参照のこと。)

(226) ここで「直後に生起する眼という感覚器官」の原因として想定される直前の眼は, アビダルマの体系に促えはば <同類因>か <能作因>に分類されると考えられる。すなわち, <同類因>としての直前の眼からはその <等流果>としての「直後に生起する眼という感覚器官」が生じるが, 同時に <能作因>でもある直前の眼からは, <増上果>として「眼という感覚器官」という結果が生じる, ということである。

(227) AKBh によると, <土用果>は <俱有因>と <相応因>という二つの原因からだけでなく, 例えば <同類因>など他の原因から生起することもあるとされる。AKBh 95,4-6: *kim anyeṣām apy asti puṣākāraphalam utāho dvayor eva. anyeṣām apy asty anyatra vipākahetoḥ. yasmāt sahotpannam vā samanantarotpannam vā puṣākāraphalam bhavati, na caivam vipākah*. 「[問:] 土用果は他 [の原因] の [結果] でもあるのか, あるいは [俱有因・相応因という] 二つ [の原因] のみの [結果] であるのか。[答:] 他 [の原因] の [結果] でもある。[ただし] 異熟因の [結果は, 土用果とは] 別のところにある。土用果は, [原因と] 共に生起するか, [原因の] 直後に生起するものであるが, 異熟 [因] はそうでないからである。」(櫻部 [1969: 384f.] も参照のこと。)

(228) <増上果>は, AK および AKBh において以下のように説明されている。AKBh 94,19-21: *pūrvasyādhipatam phalam* / (AK 2.56b) *kāraṇahetoḥ pūrvam uktatvāt pūrvah. tasyādhipajam phalam. anāvaranabhāvamātreṇāvasthitasya kim ādhipatyam. etad eva. aṅgībhāvo 'pi cāsti*. 「以前 [に述べられた原因] の [結果] が <補助的な力による結果 (増上果)>である。(AK 2.56b) <あらしめる原因 (能作因)>は以前に述べられたので, 『以前 [の原因]』である。それ (=能作因) の [結果] が補助的な力によって生起する結果である。[問:] [補助的な力とは, ] 単に [結果の生起を] 妨げないということのみによって定立されたものであるのに, どうして補助的な力 (増上) がある [といえる] のか。[答:] このこと (=妨げないこと) 自体が [増上] である。また, [能作因にも結果を] 生起させる性質がある。」(櫻部 [1967: 392], [1969: 383f.] も参照のこと。)

(229) <等流果>は, AK および AKBh において以下のように説明されている。AKBh 94,24f.: *sabhāgasarvatragayor niṣyandah* // (AK 2.56cd) *sadrśaphalatvād anayor niṣyandaphalam*. 「同類の [原因] (同類因) と全てに通じる [原因] (遍行因) には, <流れ出る [結果] (等流果)>がある。(AK 2.56cd) [原因に] 類似した結果を有することから, これら二つ [の原因のみ] に <流れ出る結果>がある。」(櫻部 [1967: 393], [1969: 384] も参照のこと。)

(230) AKBhT における平行箇所 (AKBhT D137b7-138a1; P273b5f.; 秋本 [1993: 62,7-10]) の訳等については, 秋本 [1993: 53] を参照のこと。

(K506,19; S617,17) [反論 (経量部):] そうである場合、＜同類の [原因](sabhāga[-hetu], 同類 [因])<sup>(231)</sup>>や＜全てに通じる [原因](sarvatraga[-hetu], 遍行 [因])<sup>(232)</sup>>や＜応報をもたらす原因 (vipākahetu, 異熟因<sup>(233)</sup>)>が過去のものであったとしても、[＜流れ出る結果＞等の<sup>(234)</sup>＜結果を与えること＞が認められることになるので、[これら過去の原因が] 現在のものであることになってしまう。あるいは、作用とは＜結果を与えることと受け取ること＞という [両方の] 特徴を兼ね備えたものであると認められるとしても、過去の同類因等は [結果を与えるものでもあるため] 半分現在のものであるということになってしまう<sup>(235)</sup>。以上のような [作用説の] 欠陥を懸念して、サンガパドラ (Saṃghabhadra) 先生<sup>(236)</sup>は [以下のように] 述べる。

「諸々の存在要素の作用とは、結果を引き寄せる能力のことであって、結果を生み出すことではないと述べられる。そして、諸々の過去のものである同類の原因等には、結果を引き寄せることはない。まさしく現在という境位において [結果を] 引き寄せ終えているからである。また、[すでに結果を] 引き寄せ終えたものが [さらに結果を] 引き寄せることは不合理である。無限遡及となってしまうからである。それ故、諸々の過去のものには作用はありえない。従って、[過去のものに現在のものの特徴があるというような] 特徴の混乱はない<sup>(237)</sup>」と。

(231) <同類因>は、AK および AKBh において以下のように説明されている。AKBh 85,8–13: **sabhāgahetuḥ sadṛśāḥ** (AK 2.52a) **sadṛśā** dharmāḥ sadṛśānām dharmānām **sabhāgahetuḥ**, tadyathā kuśalāḥ pañca skandhāḥ kuśalānām anyonyam klišṭāḥ klišṭānām avyākṛtā avyākṛtānām. ... bāhyesv api yavo yavasya śālīḥ śāler iti vistareṇa yojyam. 「＜同類の原因＞とは、類似したものである。(AK 5.52a) 諸々の類似したダルマは、諸々の類似したダルマの＜同類の原因＞である。例えば、善なる五蘊は善なる [五蘊] にとって相互に [同類の原因であり]、諸々の汚れた [ダルマ] は諸々の汚れた [ダルマ] にとって、[善とも悪とも] いえない諸々の [中性のダルマ] は [善とも悪とも] いえない諸々の [中性のダルマ] にとって、[同類の原因である]。(中略) 諸々の外界 [の事物] についても、麦は麦の、稲は稲の [同類の原因である] というように、広く適用されるべきである。」(櫻部 [1967: 388], [1969: 359f.] も参照のこと。)

また、AKBh 85,22f.: **agrajāḥ** (AK 2.52b') pūrvotpannāḥ paścimānām utpannānutpannānām sabhāgahetuḥ. anāgatā naiva sabhāgahetuḥ. 「＜同類の原因＞は [先に生じたものである。] 諸々の先に生じた [ダルマ] が、[後に] 生じた、あるいは未だ生起しない諸々の [ダルマ] の＜同類の原因＞である。諸々の未来の [ダルマ] は決して＜同類の原因＞ではない。」(櫻部 [1967: 389], [1969: 361] も参照のこと。)

(232) <遍行因>については、AKBh 89,2–5 ad AK 2.54ab および櫻部 [1967: 390], [1969: 370f.] を参照のこと。

(233) <異熟因>については、AKBh 89,15–17 ad AK 2.54cd および櫻部 [1967: 390f.], [1969: 371–374] を参照のこと。

(234) AKBhT D138a1; P273b7; 秋本 [1993: 62,11f.]: 'bras bu 'byin pa'i phyir (AKBh 297,16: phaladānāt) dang zhes bya ba la rgyu mthun pa dang / より、このように補った。

(235) AKBhT における関連箇所 (AKBhT D138a1f.; P273b6–8; 秋本 [1993: 62,10–63,2]) の訳等については、秋本 [1993: 54] を参照のこと。

(236) サンガパドラ (衆賢) は、カシュミール地方出身の説一切有部の論師で、活動年代は AKBh の著者ヴァスバンドウ (ca 400–480) とほぼ同時代の 5 世紀頃 (Frauwallner [1973: 97f.]) と推定される。主な著作に、\*Nyāyānusāra-śāstra (『阿毘達磨順正理論』玄奘訳, Taisho 1562, vol. 29, 以下 NAŚ と略) と \*Abhidharmasamayapradīpikāśāstra (『阿毘達磨顯宗論』玄奘訳, Taisho 1563, vol. 29) がある。両者ともサンスクリット原典およびチベット訳を欠き、漢訳のみが現存している。両者のうち NAŚ は、経量部的傾向をもつ AKBh の所説を正統有部の立場から批判した書としても有名である。TSP「三時の考察」章の他、AKBhT, AKV, Abhidharmakośaṭīkālakṣaṇānusārinī-nāma (チベット訳, D4093; P5594) 等に引用断片が見られる。サンガパドラの著作や伝記、ヴァスバンドウとの関係等の詳細については、Cox [1995: 53–63] を参照のこと。

(237) Schayer [1938: 36, n.4] でも指摘されている通り、この部分は NAŚ 631c5–17 の内容が要約されたものとなっている。(当該箇所訳については、Schayer [1938: 36–39, n.4], 福田 [1988: 50f.], 秋本 [2002: 26f.] を参照のこと) また AKBhT における平行箇所 (AKBhT D138a2–5; P273b8–274a4; 秋本 [1993: 63,2–9]) においてもサンガパ

## 2.2. 作用と存在要素の関係について: 経量部の立場からの批判

## 2.2.1. 作用が存在要素と異なる場合

[シャーンタラクシタは]「**tair**」云々ということによって反論する。

この作用 (**kāritra**) は、存在要素と異なるものであるか、それ (=存在要素) と同じものであるかのいずれかであると彼ら (=説一切有部の人々) によって認められなければならない。なぜなら、[その両者] 以外の可能性は、実在に関するものとしては決して存在しないからである<sup>(238)</sup>。(TS 1793)

[作用が存在要素と] 異なるものである場合、[推論式:] 「諸々の現在 [の存在要素] は以前にも以後にも本性をもたない [ことになる] と理解されなければならない。[あるものの] 原因であることや因果的存在 (**samskrta**, 有為) であること等にもとづいて。ちょうど作用がそうであるように。」(TS 1794)

さもなければ (=現在の存在要素が以前にも以後にも本性をもつ場合)、[あらゆる因果的存在は] 恒常であるということになってしまう。[その] 本性が常に確立されていることになるからである。というのも、このような性質以外に恒常 [であること] の定義的特徴は存在しないからである<sup>(239)</sup>。(TS 1795)

その作用は、存在要素と異なるものであるか、異なるものでないかのいずれかであるということが彼ら (=説一切有部の人々) によって承認されなければならない。異なる [こと] と異なる [こと] は相互に排斥し合うことによって確立されることを特徴とするから [であり]、[また二者のうちの] 一方の否定は他方の肯定と不可離の関係にあるからである。実在に関して [異なるか異なるか以外の] 別の可能性は存在しない。それら [二つの可能性] のうち、もし [作用が存在要素とは] 異なるものである場合、[推論式:] 「諸々の現在 [の存在要素] は、以前と以後の状態において<sup>(240)</sup>本性をもたないことになるであろう。『[あるものの] 原因であることや因果的存在であること等』という証因にもとづいて。ちょうど作用がそうであるように。」[TS 1794c の「原因であることや因果的存在であること等にもとづいて」における] 「等」という語によって、実在であること (**vastutva**) 等 [も] 把握される。さもなければ、[すなわち] もし以前と以後において [存在要素が] 本性をもたないということがなければ、あらゆる因果的存

ドラの説が紹介されているが、その箇所の訳等については、秋本 [1993: 54] を参照されたい。NAS や AKBhT においては能力 (**sakti**) と作用 (**kāritra**) のちがいがなど、TSP では曖昧であった点が詳細に論じられている。NAS によると、存在要素の能力には二種、すなわち作用 (=結果を引き寄せる能力) とそれとは別の能力 (眼の色を見る能力や結果を与える能力等) があるという。例えば、暗闇においては眼の見る能力は妨げられるものの、作用 (=結果を引き寄せる能力) は妨げられないため、作用の有無によって三世の区別が確立されると考えることができる。なお、サンガバドラの作用説については、秋本 [2002]、青原 [1986]、福田 [1988] も参照のこと。

<sup>(238)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「それ以外に実在するものの取るべき形式はないからである。」

<sup>(239)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「そうでなければ、自性は常に固定したものとなるから、[すべての有為のものが] 常住なものとなってしまう。実際 [恒に変わらず存続するダルマの] 本体を離れて、常住の相はありえない。」

<sup>(240)</sup> 説一切有部による三世実有論の文脈でいえば、この **avasthā** は「境位」と訳すべきであろうが、この部分はシャーンタラクシタによる批判なので、より一般的に「状態」と訳出した。

在は恒常であるということになってしまう。[その]本性があらゆる時に確立されることになるからである。また、[本性が]常に存在することを除いては、恒常であることの定義的特徴は存在しない。[ダルマキールティも]以下のように述べている。

「賢者たちは、消滅することのない本性 (svabhāva) のことを恒常なものと呼ぶ<sup>(241)</sup>。(PV 2.204ab)」

と。(TSP ad TS 1793–1795)

(K507,3; S618,18) 以下のような[反論]があるかもしれない。「もし[あらゆる存在が]恒常であることになる<sup>(242)</sup>場合[でも]、どうして<原因であることや因果的存在であること等>という証因<sup>(243)</sup>が所証 (=以前にも以後にも本性をもたないこと)の異類と矛盾するといえるのか<sup>(244)</sup>」というので、「nityasya」云々と答える。

恒常なものが[あるものの]原因であることは、[その原因が]継時的に[結果をなすこと]とも同時に[結果をなすこと]とも矛盾するので、以前にすでに否定された。実に、<因果的存在であること>が恒常なものにおいて[成立する]余地がないことは明白である<sup>(245)</sup>。(TS 1796)

作用が[五]蘊 (skandha) 等とは別のものとして詳説される (upavarṇana) なら、自派の定説との矛盾は避けがたいものとなるであろう。(TS 1797)

「以前に」とは「恒常な存在の考察 (=TS/TSP 第8章)」においてである。[説一切有部を含む全ての仏教徒にとって]あらゆる因果的存在が無常であることは認められているので、<因果的存在であること>が恒常なものにおいてありえないということはまさしく明確に決定されている。さらにまた、作用が[五]蘊・[十八]界 (dhātu)・[十二]処 (āyatana) とは別のものとして詳説されるなら、定説との矛盾が起こる。というのもすなわち、世尊によって

「バラモンよ、あらゆる一切のものというのはすなわち、五蘊と十二処と十八界である」

<sup>(241)</sup> Vetter[1990: 104]の独訳も参照のこと。

<sup>(242)</sup> 校訂テキストの脚注にも示した通り、文脈からJの読み: nityatāsaktihを採用する。反論者のここでの言明は、直前のTS 1795aにおける「さもなければ (=現在の存在要素が以前にも以後にも本性をもつ場合)、[あらゆる因果的存在は]恒常であるということになってしまう」を受けていると考えられるからである。反論者は立論者の結論 (=現在の存在要素が以前にも以後にも本性をもつと考えた場合、あらゆる存在は恒常であることになってしまう)を受けつつ、改めてそのような場合でも、恒常なものが[あるものの]原因であつたり因果的存在であつたりする可能性を指摘していると理解しておきたい。

<sup>(243)</sup> TS 1794に見られる、作用が存在要素と異なる場合の推論式: 「諸々の現在 [の存在要素] は以前にも以後にも本性をもたない [ことになる] と理解されなければならない。[あるものの] 原因であることや因果的存在 (saṃskṛta, 有為) であること等にもつづいて。ちょうど作用がそうであるように」における証因「[諸々の現在の存在要素は、あるものの] 原因であり因果的存在等であるから」を指す。

<sup>(244)</sup> この反論者の問いの意図は、簡潔に言うると、恒常なものであつても何らかの別のものの原因となつたり、恒常なもの自体が因果的存在であつたりすることがあるのではないか、といったものであると考えられる。

<sup>(245)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「有為性が常住なものに依処を持たないことは明らかである。」

と述べられているからである。(TSP ad TS 1796–1797)

### 2.2.2. 作用が存在要素と異なる場合

[作用が存在要素と]異なる場合はまた、[推論式:]「作用はあらゆる時間に存在することになる。存在要素と相違しないことから。存在要素[自身の]固有の性質 (svarūpa) のように<sup>(246)</sup>。」(TS 1798)

それ故また、このような[三]世の区分はそれ(=作用)によって規定されることはない<sup>(247)</sup>。というも、それ(=作用)の喪失・獲得・未獲得は、別々に[起こることは]ないからである<sup>(248)</sup>。(TS 1799)

(K508,1; S619,10)あるいはもし[存在要素と]異なる作用が承認されれば、ちょうど存在要素[自身]の固有の性質のように、それ(=存在要素)と相違しないことから、それ(=作用)もまたあらゆる時間に存在することになる。それ故また、作用を失ったものが過去のもので、それ(=作用)を獲得したものが現在のもので、それ(=作用)を未だ獲得していないものが未来のものである、というような作用による[三]世の区分はありえないであろう。なぜなら、もしこの作用の喪失・獲得・未獲得が別々に[起こり]うるなら、このような[三]世の区分はありうるであろうが、[実際には]それら(=作用の喪失・獲得・未獲得)は、別々には[起こり]えないからである。[なぜそれらが別々に起こりえないかといえ、]常に存在し単一の性質をもつものには[そもそも]区分が存在しないからである<sup>(249)</sup>。(TSP ad TS 1798–1799)

あるいは作用と相違しない[とすればその]ことから、存在要素は、ちょうど作用と同様に、以前と以後[の際]が切断され、中間[部分]のみであるような存在性を有するものとなるであろう<sup>(250)</sup>。(TS 1800)

(K508,8; S619,16)さらに作用と相違しない[とすればその]ことから、存在要素はまた、ちょうど作用のように、以前と以後の際を欠いた存在性と結びつくことになる。[pūrvāparavyavacchinna-madhyamātraka-sattvavān という複合語のうち]「以前と以後[の際]が切断された」[という句]は以前と以後の際を欠いた[という意味で、「以前と以後[の際]が切断され、]

<sup>(246)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「ダルマそれ自体のように・・・」

<sup>(247)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「それ[「作用」]によって三世の区分を考えるのは正しくない。」

<sup>(248)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「常住なダルマと一体の]その[「作用」]が已に滅したとか、現に獲得されているとか、まだ獲得されていないなどの区別はありえないからである。」

<sup>(249)</sup> Cf. Schayer [1938: 41f.]: “Indeed this distinction of Times is possible only when attaining and not attaining [of the present] are understood as [two real and] distinctly differentiated [states] of the *kāritra* and precisely those two [states] cannot be distinctly differentiated because there is no such a differentiation for [entities] which perpetually persist in the same unique essence.”

<sup>(250)</sup> Cf. 太田 [1979: 56]: 「また、ダルマは「作用」と別でないから、「作用」と同様に、時間的前後の両際から断絶した中間のみにある、瞬間的存在となるであろう。」また、cf. 菅沼 [1964: 88]: 「あるいは、法もまた作用を離れないのであるから、作用のごとくに、前と後を切り離れた真中においてのみ存在性をもつもの (sattvavat) であろう。」

中間 [部分] のみであるような存在性」というように分解される。これ (=存在要素) にそのようなものが存在するというのが、「そのこと (=以前と以後 [の際] が切断され、中間 [部分] のみであるような存在性) を有する」ということである。(TSP ad TS 1800)

### 2.3. 作用の第三の可能性に対する批判と作用の作用の否定

(K508,11; S619,19) [シャーンタラクシタは] 「*kāritram*」云々ということにより、[説一切有部が] 相互に矛盾することを認めていることを指摘して嘲笑する。

[説一切有部は、] 作用は必ずしも [三時] 全ての時において存在するわけではないが、存在要素は常時 [存在する] と述べる一方で、作用は存在要素と異なるものではない [とも述べる]。[これは] 明らかに神々のなせる業 (*devaviceṣṭita*) である。(TS 1801)<sup>(251)</sup>

もし別の作用に依拠して [三] 世が定立されるという場合、それ (=別の作用) に対しても [これまでと] 同じ詰問 (*paryanuyoga*) が [向けられるだけでなく、その後さらに想定される] 全て [の作用] に対してこの [詰問] が向けられる [ことになる] のではないか<sup>(252)</sup>。  
(TS 1802)

[説一切有部に対する反論:] 「そのようである (=存在要素と作用が異なる) 場合、物質的存在等の存在要素は作用と相違しないことから、必ずしも常に存在するとは限らないということになる」というならば、[説一切有部は] 「存在要素は常時 [存在する]」と答える。[反論:] 「そうであるとしても、[存在要素が常時存在することを認めれば] 作用は存在要素と異なるものであることになってしまう」というならば、[説一切有部は] 「一方また、作用は存在要素と異なるものではない」と答える。「神々」とは、主宰神 (*īśvara*) 等のことである。[「神々のなせる業である」とは、] 彼ら (=神々) は [ある行為が] 合理的か合理的でないかを考えることなくまさしく恣意的に (*svātantryeṇa*) 行動する。ちょうどこのような、彼ら (=神々) のなす合理性とは無関係な行いが恣意的な行動であるように、これ (=説一切有部の主張) もそれ (=神々のなす行い) と同様であるという意味である。(TSP ad TS 1801)

<sup>(251)</sup> ここでは AKBh にも見られる以下の偈が踏まえられているが、この偈は AKBh において、ヴァスバンドウによる説一切有部説に対する批判を支持するものとして引用されている。(秋本 [2002: 29] も参照のこと)

AKBh 298,20-23: āha khalv api:

svabhāvaḥ sarvadā cāsti bhāvo nityaś ca neṣyate /

na ca svabhāvād bhāvo 'nyo vyaktam īśvaraceṣṭitam //

「実に [ある人は] また [以下のように] 述べた。『[存在要素の] 本性は常に存在するが、その状態は恒常であるとは認められない。しかも、状態は本性とは別のものではない。[これは] 明らかに主宰神のなせる業である。』」(訳は秋本・本庄 [1978: 91] も参照のこと)

<sup>(252)</sup> Cf. 太田 [1979: 56f.]: 「もし、もう一つ別の「作用」によって、その「作用」の時間的区分が成立すると考えても、[それら二つの「作用」が別であるか、そうでないかによって、前と] 同様の問題がどこまでもつきまとう。」

さらに、もし [ある] 作用が [別の] 作用 [を想定すること] なしに<sup>(253)</sup> 未来等のものであると認められる場合、[三] 世 [それぞれ] が作用によって確立されると述べられるべきではない。[作用自身の三世それぞれが作用によって確立されないこととなるため] 逸脱となるからである。ちょうど作用がそれ自体の存在性に依拠して未来のもの等として確立されるのと同様に、諸々の事物もまた [それ自体の存在性に依拠して] 未来のもの等であることになるであろう。その場合、作用を想定することにどのような意義があるのか [、いや無意義である]<sup>(254)</sup>。あるいはもし逸脱の誤りがあってはならないと [考えて] <作用の作用> も [仮に] 認めるとすると、それ (=作用の作用) に対しても、[存在要素との相違・不相違等あるいは二つの作用の間の] 相違 [・不相違] 等が検討されることによって同じ詰問が [向けられる] 他、無限遡及の誤り [に陥ること] となる<sup>(255)</sup>。(TSP ad TS 1802)

#### 2.4. 「存在要素の本性は作用によって区別される」という主張とそれに対する批判

(K508,25; S620,11) 「[存在要素と] 異なる場合はまた、作用はあらゆる時において存在することになる。ちょうど存在要素 [自身] の固有の性質 (dharmasvarūpa) のように。[存在要素との] ちがいがいから (cf. TS 1798, TSP 619,10f.)」と述べられたことに対して、尊者サンガバドラは述べる。

[サンガバドラ:] 「[ある存在要素の] 固有の性質と相違しないにもかかわらず<sup>(256)</sup>、[その存在要素を他の存在要素から区別する] 限定要素 (viśeṣa)<sup>(257)</sup>が見られる。例えば [地の要素等とその属性である] <抵抗性をもつこと> (sapatighatva)<sup>(258)</sup> のように」とい

<sup>(253)</sup> AKBhTにおける平行箇所においては、「別の作用なしに (bya ba gzhan med par)」となっている。(AKBhT D139a7f.; P275b1f.; 秋本 [1995: 182,5f.]: gal te bya ba la bya ba gzhan med par ma 'ongs pa la sogs pa nyid du 'dod na ...)

<sup>(254)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D139a7-b2; P275b1-3; 秋本 [1995: 182,5-9]) の訳等については、秋本 [1995:176] を参照のこと。

<sup>(255)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D139b2f.; P275b3f.; 秋本 [1995: 182,9-11]) の訳等については、秋本 [1995: 176] を参照のこと。

<sup>(256)</sup> Cf. 太田 [1979: 57]: 「ダルマは、ものそれ自体 (svarūpa) と別でなくても・・・」

<sup>(257)</sup> viśeṣa という語は、TSP と若干文脈は異なるものの、YBh の三世実有論の中にも見られる。Cf. YBh 183,10-12 ad YS 4.12: sataś ca phalasya vartamāṅikarāṇe samartham, nāpūrvopajane. siddham nimittam naimittikasya viśeṣānugrahaṇam kurute, nāpūrvam utpādayatīti. 「また、[行為は] 存在している結果を現在のものにする能力をもつのであって、新たなものを生み出す [能力をもつ] わけではない。確立された動力因は、動力因によって生み出されるものに特性を付与するのであって、新たなものを生み出すわけではない。」

<sup>(258)</sup> sapatigha という語は AK 1.29b に見られるが、AKBh では以下のように注釈されている。sapatigha なるものとは具体的に、色蘊に含まれる十界つまり5つの感覚器官 (視覚器官～触覚器官) とその対象 (色かたち～感触) のことを指す。

AKBh 19,4-6: sapatighā daśa / rūpiṇaḥ (AK 1.29bc)

ya ete rūpaskandhasaṃghitā daśa dhātava uktās te sapatighāḥ. pratigho nāma pratighātaḥ. sa ca trividhaḥ. āvaraṇaviśayālabhanapatighātaḥ. tatrssvaranapatighātaḥ svadeśe parasyotpattipratibandhaḥ. yathā hasto haste pratihanyate, upale vā, upalo 'pi tayoh. 「物質的存在に属する十のものは、抵抗性をもつものである。(AK 1.29bc) すでに説かれたこれら色蘊に含まれる十界は、抵抗性をもつものである。『抵抗』とは、抵抗することである。そしてそれは三種類ある。障害 [として抵抗性をもつこと] と領域 [として抵抗性をもつこと] と対象 [として抵抗性をもつこと] とである。そのうち、障害として抵抗性をもつことは、自身の [存在する] 場所において他のものが生起することに対して妨げとなることである。例えば、手は [他の] 手 [がある場所] において [存在することを] 妨げられ、岩は [他の] 岩 [がある場所] において [存在することを] 妨げられる。[手と岩の] そ

うならば、[答:] このことは、目下議論されていることに関して[あなた方に]有利に働くことは決してない<sup>(259)</sup>。(TS 1803)

というのも、[必ず]引き続いて存在する (anugāmin) 事物 (padārtha) のもつ<抵抗性をもつこと>等 [の属性] は、時折起こるもの (kāḍācitka) とは決して考えられていないからである。まさしく存在とは、そのようなものとして (=同種のものと同種のものから排除されたものとして) 生起する (udbhava)<sup>(260)</sup>からである<sup>(261)</sup>。(TS 1804)

[サンガパドラ:] 「[ある存在要素の] 固有の性質と相違しないにもかかわらず、[その存在要素を] 限定する属性が見られる。例えば、地 [の要素] 等<sup>(262)</sup> に抵抗性をもつこと等 [といった属性が見られる] ように。というのも、それら (=地の要素等) は事物としては区別されないとしても、「抵抗性をもつ」「抵抗性をもたない」「眼に見える (sanidarśana)」「眼に見えない (anidarśana)」<sup>(263)</sup> といった、[存在要素の] 固有の性質と相違しない諸々の属性によって [他のものから] 区別されることが理解される。それと同様に、存在要素は作用によっても [区別されるのである] と。

の両者 [がある場所] において、[別の] 岩はまた [存在することを妨げられる。]

<sup>(259)</sup> Cf. 太田 [1979: 57]: 「しかしそれは本論に何ら資するところはない。」

<sup>(260)</sup> チベット訳では、brjod phyir ro (TS), また bstan pa yin te (TSP) と訳されており、udbhava を「言及されること」「表現されること」といった意味で解釈しているようである。

<sup>(261)</sup> Cf. 太田 [1979: 57]: 「あるダルマが実体 (padārtha) に結びつくのは常に一定しているから、ダルマを] 包摂する実体の「抵抗性」等のダルマが、一時的なものとは考えられない。存在は [分解不可能な統一体で]、そのように [同種のものであれ、異種のものであれ、他の存在から区別されたものとして] 生成しているのであるから [実在と一体のダルマが、一つの實在に区別を与えることはできない。]

<sup>(262)</sup> ここで言う pṛthivī とは、大地そのものではなく、四大元素としての「地」の要素あるいはその地の要素から構成されるものを指すと考えられる。大地そのものと地の要素のちがいで、AKBh では以下のように述べられている。

AKBh 8,23–9,2: kaḥ punaḥ pṛthivyādīnāṃ pṛthivīdhātuvādīnāṃ ca viśeṣaḥ. pṛthivī varṇasamsthānam ucyate lokasamjñayā / (AK 1.13ab) tathā hi pṛthivīm darśayanto varṇaṃ samsthānam ca darśayanti / 「それでは、地など地の要素などにはいかなるちがいがあのか。世間一般の呼び名として、地といえば色と形 [を指す]。 (AK 1.13ab) というのもすなわち、『地』を示そうとする者は、色と形を示すからである。(この箇所訳等については、櫻部 [1969: 159f.] を参照のこと。)

<sup>(263)</sup> sanidarśana, anidarśana という語は、AK 1.29ab に現れるが、そこでは十八界のうち色かたちのみが sanidarśana なるもので、それ以外が anidarśana なるものとされている。

AKBh 18,24–19,2: ye punar ime aṣṭādaśa dhātava uktāḥ teṣāṃ kati sanidarśanāḥ kati anidarśanāḥ. sanidarśana eko 'tra, rūpaṃ / (AK 1.29ab) sa hi śakyate nidarśayitum idam ihāmutreti. uktaṃ bhavati anidarśanāḥ ṣeṣā iti. 「すでに述べられた十八界のうち、どれだけのものが眼に見えるもので、どれだけのものが眼に見えないものなのか。このうち、一 [種、すなわち] 色 [界] は、眼に見えるものである。というのも、それ (=色かたち) は『これはここに [ある]、あそこに [ある]』と指し示すことができるからである。残りのものは眼に見えないものである。」

またヤショーミトラは nidarśana を以下のように注釈している。AKVy 58,5–7: kim idaṃ nidarśanaṃ nāma. yena viśeṣa yogāt tad vastu tathā nidarśayitum śakyate, sa viśeṣo nidarśanam ity ucyate. vacanena parasya cakṣurvijñānam utpannam vā nidarśanam.

[答:]<sup>(264)</sup> まさにこのことは、目下議論されていることに関して[あなた方に]有利に働くこととはない。というもすなわち、ここで議論されていることとは以下の通りである。作用が事物とは異ならないことが認められる場合、まさしく同一の事物について、[その事物]それ自体であるところの作用には[その事物との]ちがいはないのであるから、それ(=作用)によってこのような[三]世の区分[がなされること]は妥当ではない、という[ことである]。一方、地[の要素]等は相互の特徴のちがいと結びつくことによって互いに区別される、ということは正しい。なぜなら、あるものは抵抗性をもつが、あるものは例えば感受(vedanā)<sup>(265)</sup>等のように抵抗性をもたないからであって、抵抗性をもたないその同じものが抵抗性をもつものになるということはないからである。なぜなら、**時折起こるものでありうるような抵抗性をもつこと**等の属性をもつ地[の要素]等のあるものが、[必ず]引き続いて存在するような同一の事物それ自体として存在することは決してないからである。それではどうなのかといえば、部分をもたない**存在は、そのようにしてつまり同種のものと同種のものから排除されたもの(=独自相)として<sup>(266)</sup>生起する**。従って、[ある事物自身の]固有の性質と相違しないような[ある]属性が同一[の事物]を区別するものになることは正しくない。(TSP ad TS 1803–1804)

(K509,13; S620,24) [反論:] 「もし[ある事物自身の]固有の性質と相違しない[ある]属性が[同一の事物を]区別するものにはなりえないとすれば<sup>(267)</sup>、どうして『物質的存在<sup>(268)</sup>は抵抗性をもつものである』というようにあたかも[事物自身の固有の性質とその属性が]異なるような表現がなされるのか」というので、「**anākṣipta-**」云々と答える。

<sup>(264)</sup> Schayer[1938: 45] は、ここ以降の箇所についてもサンガパドラの説と理解しているようであるが、直後の TS 1805 は明らかにシャーンタラクシタの自説であり、反論と答弁の流れを考慮すれば、この答弁もシャーンタラクシタによる自説とする方が妥当であると思われる。TS 1804cd に対する翻訳(Schayer[1938: 44]: “we reply: this theory is useless against the argument in question.”)を見る限りは、Schayer[1938] もそのように理解しているように見える。

<sup>(265)</sup> AKBh において、vedanā は楽・苦・不苦不楽という三種類の直接経験であると定義されている。AKBh 10,12–14 ad AK 1.14c: **vedanānubhavaḥ (AK 1.14c)** trividho ’nubhavo vedanāskandhaḥ. sukho duḥkko ’duḥkhāsukhaś ca. sa punar bhidyamānaḥ ṣaḍ vedanākāyāḥ, caḥṣuḥsaṃsparaśajā vedanā yāvan manaḥsaṃsparaśajā vedaneti. 「感受とは直接経験である。(AK 1.14c) 受蘊とは、楽と苦と不苦不楽の三種である。それはさらに分けると、六つの感受の集まりである。視覚器官が[視覚の対象である色かたちと]接触することから生まれる感受、乃至、心が[対象と]接触することから生まれる感受[の6つ]である。」 Cf. AKBh 54,19–20: tatra vedanā trividho ’nubhavaḥ. sukho duḥkko ’duḥkhāsukhaś ca.

<sup>(266)</sup> Cf. PV 1.40 (=PVin 2.29): sarve bhāvāḥ svabhāvena svasvabhāvavyasthiteḥ / svabhāvaparabhāvābhyām yasmād vyāvṛttibhāgināḥ // 「全ての事物は、それ自体として、[それぞれ]それ自身の固有の性質において確立されているため、同種類のものと同種類のものからの排除に依拠している。」 なお Ishida[2011: 198f.] によると、シャーキャブッディは anyāpoha を三種に分類し、その第一のものとして「排除された独自相(vyāvṛttaṃ svalakṣaṇaṃ)」を挙げているとされる。

<sup>(267)</sup> Cf. Schayer[1938: 45]: “if there is no *sapratighatva* as a principle of differentiation existing independently of the *svarūpa* itself, ...”

<sup>(268)</sup> ここでの rūpa は物質的存在、つまり「色かたち」ではなくいわゆる「十色界」のことを指す。また「十色界は抵抗性をもつ」という表現は、以下の AK, AKBh における記述に基づいていると考えられる。AKBh 19,4–6: **sapratighā daśa / rūpiṇaḥ (AK 1.29bc)** ya ete rūpaskandhasamgrhītā daśa dhātava uktās te sapratighāḥ. 上記のうち「十のもの(daśa)」とは、具体的に色蘊に含まれる十界すなわち五つの感覚器官(視覚器官～触覚器官)とその対象(色かたち～感触)を指す。

他の区別が言及されていないような[表現, 例えば]「物質的存在にはそれ (=抵抗性をもつこと)がある」といった表現により, まさしく[同一の]存在がそのように (=あたかも異なるものであるかのように)述べられる。ちょうど, 「心には潜在印象がある」[という表現]のように<sup>(269)</sup>。(TS 1805)

「他の区別が言及されていないような[表現]により」とは, 別の区別を否定することによって<sup>(270)</sup>という意味である。「そのように表現される」とは「あたかも異なるものであるかのように[表現される]」ということである。「それ」とは抵抗性をもつことである。「表現によって」とは, 「物質的存在は抵抗性をもつ」というこの[表現]によって[ということである]。[シャーンタラクシタは]このことに関して実例を述べる。「ちょうど『心には潜在印象がある』[という表現]のように」と。「api ca」という[二語の]集合としての<sup>(271)</sup>不変化辞は, [ここでは]iva(～のように)の意味で[用いられている]と理解されるべきである。(TSP ad TS 1805)

(K509,21; S621,11) 再び同じ者 (=サンガバドラ) が述べる。

「作用は存在要素と異なる。それ (=作用) とは別個に [存在要素の] 本性が認識されることはないからである。また [作用は] 単なる存在要素でもない。たとえ [存在要素の] 本性が存在するとしても, [作用は] 存在しない時があるからである。一方, [作用と存在要素あるいはその本性との間に] ちがいがなければでもない。[存在要素の本性は過去にも存在するが, ] 作用が [それ自身の生起] 以前に存在することはないからである<sup>(272)</sup>。[作用と存在要素の関係は] ちょうど<連続体 (saṃtāna) > [と存在要素の関係] と同様に [理解されるべきである]。ちょうど存在要素の間断のない生起が連続体と呼ばれるように, これ (=連続体) は存在要素と異なるものではない。それ (=存在要素) とは区分できないものとして把握されるからである。また, [連続体は] 単なる存在要素であるということもない。一刹那すらもまた連続体であることになってしまうからである。しかしながら [連続体は] 存在しないわけではない。それ (=連続体) の結果<sup>(273)</sup>は実在するからである<sup>(274)</sup>」

<sup>(269)</sup> Cf. 太田 [1979: 57]: 「他の種別を排除することなしに (予想しながら), 実在するものの一つの特性だけが, そのように, [属性と属性保持者という別個の関係として] 言葉で表現される。例えば, 「心の習気」という [表現の] 如くである。」

<sup>(270)</sup> カマラシーラは, anākṣiptānyabhedena という句を, śabdena にかかる所有複合語とは取らず, śabdena とは別の独立した副詞句として解釈している。

<sup>(271)</sup> Cf. kyang yang zhes bya ba'i tshig phrad gnyis tshogs nas ... T.

<sup>(272)</sup> ここでは, 作用が存在する現在時においては存在要素と異なることはないが, 作用が存在しない過去時および未来時においては, そもそも作用が存在しないため, 作用は存在要素とは異なるということが含意されている。そのため, 「以前には存在しないからである」という理由句は, 作用と存在要素が同一であることの理由ではなく, むしろ異なることの理由であると考えられる。

<sup>(273)</sup> Cox [1995: 144] は, ここでの kārya を activity(作用) の意味で理解している。

<sup>(274)</sup> この箇所訳および解説については, Cox [1995: 144 with n.47] も参照のこと。また, AKBhT における平行箇所 (AKBhT D140a3-5; P276a7-b1; 秋本 [1995: 183,20-184,4]) の訳等については, 秋本 [1995: 178] を参照の

と。また、[サンガバドラは以下のように]述べる。

「また連続体の結果は認められる<sup>(275)</sup>。[しかしながら]そのような何らかの連続体もまた存在するというのではない<sup>(276)</sup>。それと同様に、作用によって[三]世の[区分が]完成されるということをして、論理に従って理解しなければならない<sup>(277)</sup>」

と。

## 2.5. 作用と存在要素の本性(法自性)の関係性についての批判

以上のことに対して[シャーンタラクシタは]「**tattvānyatva-**」云々と答える。

もし[説一切有部によって、作用は]ちょうど連続体 (**saṃtāna**) 等のように<sup>(278)</sup>、[存在要素と]同じか異なるかという仕方によっては表現されえないと述べられるなら、作用は[連続体等と]同様に世俗レベル[の存在]であるということになるのではないか。(TS 1806)

これ故また、それ(=作用)は構想されたものであるので、どのような結果[の生起]に対しても寄与することはない。ちょうど連続体のように。なぜなら実在のみが効果的作用をもつからである。(TS 1807)

そして、それ(=作用)がこのような[形で]現前すること (**saṃnidhāna**) は、真の[意味での]存在ではない。従って、それ(=作用)によってなされる三世[それぞれ]の確立は真実としては妥当ではない<sup>(279)</sup>。(TS 1808)<sup>(280)</sup>

(K510,7; S621,18)「ちょうど連続体等のように」という場合の「等」という語によって集合体等<sup>(281)</sup>[も]包含される。連続体は、連続体を構成する諸々のものと同じものとしてあるいは異なるものとして表現することはできないので、ブドガラ (**pudgala**) と同じく[それ自身の]固

こと。

<sup>(275)</sup> Cf. Cox[1995: 144]: “The activity of the stream is accepted, ...”

<sup>(276)</sup> ここでの「何らかの連続体」という表現によっては、存在要素とは別個の実体的なものとして存在するような連続体が意図されていると考えられる。

<sup>(277)</sup> この箇所訳等については、Cox[1995: 144 with n.47]も参照のこと。またAKBhTにおける平行箇所(AKBhT D140a5f.; P276b2; 秋本[1995: 184,4f.]の訳等については、秋本[1995: 178]を参照のこと。

<sup>(278)</sup> チベット訳では、TS 1806cに対応する訳(**byed pa rgyun la sogs pa bzhin //**)が第1 pādaと第4 pādaで繰り返されており、全体として5 pādaで構成されている。

<sup>(279)</sup> Cf. 太田[1979: 58]: 「またそれ[「作用」]は[概念的なものであるから、前にも後にも]実際に存在しない。従って、それによって設定される三世の区分も真実なものとはならない。」

<sup>(280)</sup> TS 1806–1807の訳については、秋本[2002: 30f.]も参照のこと。

<sup>(281)</sup> デイグナーガに帰せられる『取因假設論』(Taisho 1622, vol. 31, 885a25–887c20)によると、仮に立てられたもの(仮設, **prajñapti**)として「集合体 (**samūha**)」「連続体 (**saṃtāna**)」「特定の状態 (**avasthāviśeṣa**)」の三種のものがあるとされる。(『取因假設論』885a28–b14)同書では、集合体の例として人間の身体が、連続体の例として人間の生涯が、特定の状態の例として事物の生起・存続・消滅といった段階や無常性・眼に見えること等の特徴が挙げられている。(北川[1965: 432], 桂[2002: 270f.] また桂[2002: 270f.]が指摘する通り、ダルマキールティがアポーハ論の文脈においてこのデイグナーガの説に言及し、解説している。(PVSV 68,6–69,8) PVSVの当該箇所については、Vetter[1964: 110–112]の解説と独訳を参照のこと。

有の性質をもたない (niḥsvabhāva)<sup>(282)</sup>。それと同様に、作用もまた [それ自身の] 固有の性質をもたないことになるであろう。というのも、もし [作用にそれ自身の] 固有の性質 (svabhāva) が存在する場合、[そのような作用は] 必ず [存在要素と] 同じか異なるかのいずれかでなければならないからである<sup>(283)</sup>。(TSP ad TS 1806)

それ故また、「それ」すなわち作用は構想されたものであるから、ちょうど連続体のように、いかなる結果 [の生起] に対しても寄与することはありえない。というのも、構想された連続体による寄与はいかなる結果 [の生起] に対してもないからである。なぜなら、それ (= 構想された連続体) は [それ自身の] 固有の性質をもっていないからであり、結果の生起は [原因自身の] 固有の性質によって制限されているからである<sup>(284)</sup>。それ故、連続体を構成するものそれ自体であるところの**実在のみが、効果的作用をなす能力をもつ**のであって、構想された連続体が [効果的作用をなす能力をもつことは] ない。(TSP ad TS 1807)

それ故また、作用は仮に立てられた存在 (prajñaptisat, 施設有) であるから、以前と同様以後にも、[作用が] 勝義のレベルで**現前**することはない<sup>(285)</sup>。従って、それ (= 作用) による三時 [それぞれ] の**確立**もまた構想されたものにすぎず、真に実在するものではありえない。(TSP ad TS 1808)

<sup>(282)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D140a6f.; P276b3f.; 秋本 [1995: 184,7-9]) の訳等については、秋本 [1995: 178] を参照のこと。

<sup>(283)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D140a7; P276b4; 秋本 [1995: 184,9]) の訳等については、秋本 [1995: 178] を参照のこと。

<sup>(284)</sup> TS 1822, 1828, 1837, 1838 に現れる *niyata*-あるいは *niyama* という表現との関連から、このように訳出した。Cf. Schayer [1938: 47]: “because the production of effects is intimately bound with the *svabhāva*.” またチベット訳でも、*’bras bu skye ba ni rang bzhin dang ’brel ba’i phyir ro* // (結果の生起は [原因の] 固有の性質と結びついているから) と訳されている。

<sup>(285)</sup> AKBhTにおける平行箇所 (AKBhT D140a7; P276b4f.; 秋本 [1995: 184,10f.]) の訳等については、秋本 [1995: 178] を参照のこと。

## 参考文献と略号

## (1) 一次文献・略号

- ĀM *Āptamīmāṃsā* (Samantabhadra): see Shah 1999 and Goshal 2002.
- AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu): P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna 1967.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): see AK.
- AKBhṬ *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma* (Sthiramati): (Tib.) D4421; P5875.
- AKVy *Sphūṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): U. Wogihara (ed.), *Sphūṭārthā Abhidharmakośavyākhyā: The work of Yaśomitra*, Tokyo 1932.
- ADV *Abhidharmadīpavibhāṣāprabhāvṛtti* (anonymous): P. S. Jaini (ed.), *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, Patna 1977.
- TS *Tattvasaṃgrahakārikā* (Śāntarakṣita): (1) S. D. Shastri (ed.), *Tattvasaṃgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalashīla*, 2 vols., Varanasi 1968 (repr. Varanasi 1981) [=S]. (2) E. Krishnamacharya (ed.), *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalashīla*, 2 vols., Baroda 1926 (repr. Baroda 1984 and 1988) [=K].
- TSP *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Kamalaśīla): see TS.
- DMP *Digambaramataparikṣā* (Jitāri): H. R. R. Iyengar (ed.), *Tarkabhāṣā and Vādasthāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda*, Mysore 1952.
- NAŚ *\*Nyāyanūsārasāstra* (『阿毘達磨順正理論』) (Samghabhadra, 衆賢): Taisho 1562, vol. 29.
- PVSVṬ *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā* (Karṇakagomin): R. Sāṃkṛtyāyana (ed.), *Karṇakagomin's Commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, Kyoto 1982.
- YBh *Yogabhāṣya* (Vyāsa): Kāśīnāthaśāstrī (ed.) *Pātañjalayogasūtrāṇi*, Ānandāśrama Sanskrit Series 47, Poona 1904.
- ŚV *Mīmāṃsāslokovārttika* (Kumārila): R. Tailanga (ed.), *The Mīmāṃsā-slokovārttika of Kumārila Bhaṭṭa with the Nyāyaratnākara of Pārthasārathimīśra*, Varanasi 1898.
- HBṬĀ *Hetubinduṭīkāloka* (Durvekamīśra): S. Sanghavi and Jinavijayaji (ed.), *Hetubinduṭīkā of Bhaṭṭa Arcaṭa with Sub-Commentary Entitled Āloka of Durveka Mīśra*, Baroda 1949.

WZKSO

*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens*

## (2) 二次文献

- 青原 [1986] 青原令知, 「作用と功能 -衆賢説における実有構造-」, 『仏教学研究』 42, 1986, 21-42.
- 赤松 [1998] 赤松明彦, 『古典インドの言語哲学 1』, 東京 1998.
- 秋本 [1991a] 秋本勝, 「TS の三世実有説批判 (摘要)」, 『筑紫女学園大学紀要』 3, 1991, 1-11.
- 秋本 [1991b] 秋本勝, 「ヤシヨームトラの『俱舎論註』 -三世実有説-」, 『筑紫女学園大学・短期大学国際文化研究所 論叢』 2, 1991, 83-116.
- 秋本 [1993] 秋本勝, 「スティラマティの『俱舎論』 註 -三世実有説 (和訳) I-」, 『筑紫女学園大学・短期大学国際文化研究所 論叢』 4, 1993, 47-64.
- 秋本 [1995] 秋本勝, 「スティラマティの『俱舎論』 註 -三世実有説 (和訳) I-」, 『筑紫女学園大学・短期大学国際文化研究所 論叢』 6, 1995, 173-187.
- 秋本 [1996] 秋本勝, 「スティラマティの『俱舎論』 註 -三世実有説 (和訳) II-」, 『筑紫女学園大学・短期大学国際文化研究所 論叢』 7, 1996, 103-117.
- 秋本 [2002] 秋本勝, 「仏教における存在の定義 -その一系譜-」, 『櫻部健博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』, 京都 2002, 23-36.
- 秋本 [2003] 秋本勝, 「*Abhidharmadīpa*: 「三世実有説」和訳 (未完)」, 『瓜生津隆真博士退職記念論集 仏教から真宗へ』, 京都 2003, 35-45.
- 秋本・本庄 [1978] 秋本勝・本庄良文, 「俱舎論 -三世実有説」, 『南都仏教』 41, 1978, 84-105.
- 太田 [1979] 太田心海, 「第二十一章 三世の考察 (KK. 1785~1855)」, 『科学研究費補助金・総合研究 (A) 「八世紀インドにおける仏教と他学派との対立と交渉 (課題番号: 231006, 研究代表者: 梶山雄一)」 研究成果報告書』, 1979, 55-63.

- 小谷・本庄 [2007] 小谷信千代・本庄良文, 『俱舎論の原典研究 随眠品』, 東京 2007.
- 江島 [1986] 江島恵教, 「スティラマティの『俱舎論』註とその周辺 —三世実有説をめぐって—」, 『仏教学』 19, 1986, 5–32.
- 梶山 [2011] 梶山雄一 [著] / 御牧克己 [編], 『梶山雄一著作集 第8巻 業報と輪廻 / 仏教と現代との接点』, 東京 2011.
- 梶山 [2013] 梶山雄一 [著] / 吹田隆道 [編], 『梶山雄一著作集 第1巻 仏教思想史論』, 東京 2013.
- 桂 [2002] 桂紹隆, 「存在とは何か —ダルマキールティの視点—」, 『龍谷大学佛教文化研究所紀要』 41, 2002, 263–275.
- 北川 [1965] 北川秀則, 『インド古典論理学の研究 —陳那 (Dignāga) の体系—』, 東京 1965.
- 櫻部 [1969] 櫻部健, 『俱舎論の研究 界・根品』, 京都 1969.
- 桜部・上山 [1964] 桜部建・上山春平, 『仏教の思想 2 存在の分析 <アビダルマ>』, 東京 1964.
- 佐々木 [1974] 佐々木現順, 『仏教における時間論の研究』, 東京 1974.
- 志賀 [2015] 志賀浄邦, 「仏教における存在と時間: 三世実有論をめぐると諸問題を再考する」, 『インド哲学仏教学研究 (特別号: インド哲学諸派の<存在>をめぐると議論の解明)』 22, 2015, 151–174.
- 菅沼 [1964] 菅沼晃, 「寂護の三世実有批判論—Tattvasamgraha Traikālyaparīkṣā—」, 『東洋大学大学院紀要』 1, 1964, 75–105.
- 塚本他 [1990] 塚本啓祥・松永有慶・磯田熙文 [編], 『梵語仏典の研究 III 論書篇』, 京都 1990.
- 飛田 [2006] 飛田康裕, 「『識身足論』における三世実有の一理由の考察—なぜ、「観察されるものは、存在しなければならない」か」, 『東洋の思想と宗教』 23, 2006, 1–24.
- 飛田 [2007] 飛田康裕, 「『識身足論』の三世実有論証における二心和合の問題が占める役割」, 『印度學佛教學研究』 56-1, 2007, 370–367.
- 飛田 [2009] 飛田康裕, 「三世実有論証に付随してなぜ二心和合の問題が扱われるのか: 『識身足論』の帰謬論証における仮説」, 『久遠. 研究論文集』 1, 2009, 1–26.

- 長尾 [1987] 長尾雅人, 『撰大乘論—和訳と注解〈下〉』, 東京 1987.
- 那須 [2004] 那須円照, 「Abhidharmadīpa (『アビダルマディーパ』) の時間論—三世実有論—試訳」, 『インド学チベット学研究』 7/8, 2003/2004, 49–101.
- 那須 [2011] 那須円照, 「『俱舎論』とその諸注釈における三世実有論批判の研究 (1) —仏教の時間論—」, 『インド学チベット学研究』 15, 2011, 35–67.
- 那須 [2012] 那須円照, 「『俱舎論』とその諸注釈における三世実有論批判の研究 (2) —仏教の時間論—」, 『インド学チベット学研究』 16, 2012, 19–51.
- 那須 [2013] 那須円照, 「『俱舎論』とその諸注釈における三世実有論批判の研究 (3) —仏教の時間論—」, 『インド学チベット学研究』 17, 2013, 1–30.
- 平川 [1974] 平川彰, 『インド仏教史上巻』, 東京 1974.
- 福田 [1988] 福田琢, 「『順正理論』の三世実有」, 『佛教学セミナー』 48, 1988, 48–68.
- 舟橋 [1954] 舟橋一哉, 『業の研究』, 京都 1954.
- 若原 [1996] 若原雄昭, 「仏教徒のジャイナ教批判 (2)—Tattvasaṃgraha(-pañjikā), Syādvādaparīkṣā 研究—」, 『インド学チベット学研究』 1, 1996, 57–85.
- 渡辺 [1967] 渡辺照宏, 「撰真実論序章の翻訳研究」, 『東洋学研究』 2, 1967, 15–27.
- Frauwallner[1961] E. Frauwallner, Landmarks in the History of Indian Logic, WZKSO 5, 1961, 125–148.
- Frauwallner[1973] E. Frauwallner, Abhidharma-Studien: V. Der Sarvāstivādaḥ, WZKSO 17, 1993, 97–121.
- Frauwallner[1984] E. Frauwallner, E. Steinkellner (ed.), *Nachgelassene Werke I. Aufsätze, Beiträge, Skizzen*, Wien 1984.
- Funayama[1992] T. Funayama, A Study of *kalpanāpodha*: A translation of the *Tattvasaṃgraha* vv. 1212–1263 by Śāntarakṣita and *Tattvasaṃgrahapañjikā* by Kamalaśīla on the definition of direct perception, *Zinbun (Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University)* 27, 1992, 33–128.

- Halbfass[1997] W. Halbfass, Arthakriyā und kṣaṇikatva: Einige Beobachtungen, P. Kieffer-Pulz and J.-U. Hartmann (ed.), *Baudhavidyāsudhākaraḥ, Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday* (Indica et Tibetica 30), Swisttal-Odendorf 1997, 234–247.
- Ishida[2011] H. Ishida, On the classification of *anyāpoha*, H. Krasser, H. Lasic, E. Franco, B. Kellner (eds.), *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis, Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference. Vienna, August 23–27, 2005*, Wien 2011, 197–210.
- Schayer[1938] S. Schayer, *Contribution to the Problem of Time in Indian Philosophy*, Krakøw 1938, 28–70.
- Steinkellner et. al[2005] E. Steinkellner, H. Krasser, H. Lasic (eds.), *Jinendrabuddhi's Viśālāmalaṭī Pramāṇasamuccayaṭīkā. Chapter 1. Part I: Critical Edition*, Beijing–Vienna 2005.
- Steinkellner–Much[1995] E. Steinkellner and M. T. Much, *Texte der erkenntnistheoretischen Schule des Buddhismus. Systematische Übersicht über die buddhistische Sanskrit-Literatur II. Systematic Survey of Buddhist Sanskrit Literature II*, Göttingen 1995.
- Uno[1999] T. Uno, Ontological Affinity between the Jainas and the Mīmāṃsakas viewed by Buddhist Logicians, Sh. Katsura (ed.), *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy, Proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference Hiroshima, November 4-6, 1997*, Wien 1999, 419–431.
- Vetter[1964] T. Vetter, *Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti*, Wien 1964.
- Vetter[1990] T. Vetter, *Der Buddha und seine Lehre in Dharmakīrtis Pramāṇavārttika. Der Abschnitt über den Buddha und die vier edlen Wahrheiten im Pramāṇasiddhi-Kapitel*, Wien 1990.

## A Critical Edition and an Annotated Japanese Translation of the 21st Chapter (Traikālyaparīkṣā) of the *Tattvasaṃgraha* and *Tattvasaṃgrahapañjikā* thereon (kk. 1785–1808)

### Summary

This article is a critical edition and an annotated Japanese translation of the first half (kk. 1785–1808) of the 21st chapter (*Traikālyaparīkṣā*) of the *Tattvasaṃgraha* (TS) and *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) thereon. The portion that I edit and translate here contains the following subjects and topics: (1) the Sarvāstivādins' doctrine that the intrinsic nature (*svabhāva*) of a factor (*dharma*) exists as a real entity (*dravya*) in the three time periods (the past, present and future), even though the factor's mode, characteristic, or phase changes (TS 1785–1786), which is the so-called *sarvāstivāda*, (2) the six grounds for the *sarvāstivāda* (TS 1787–1789), (3) the theory of activity (*kāritra*) asserted by the Sarvāstivādins and Saṃghabhadra (that which occurs when there is an activity is called "[the thing at] the present time," that which loses its activity is called "[the thing at] the past time," and that which has not yet obtained its activity is called "[the thing at] the future time.") (TS 1790–1792); and (4) the criticism of the theory from the position of the Sautrāntikas (TS 1793–1808). According to Kamalaśīla, the 21st chapter of the TS was written to justify the term "*asaṃkrānti*" in TS 4, which qualifies the term *pratītyasamutpāda*, a central teaching of Buddhism. In the 21st chapter of the TS and TSP, the *sarvāstivāda* is considered to be the same as the theory of *saṃkrānti* and has been refuted as a dogma opposed to the *pratītyasamutpāda* by Śāntarakṣita and Kamalaśīla.

The *sarvāstivāda* maintained by the four Vaibhāṣika masters (Dharmatrāta, Ghoṣaka, Vasumitra, Buddhadeva) can be traced back to the *\*Mahāvibhāṣāśāstra* (ca. 2–3rd cent.). This tradition is also found in the *Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) and *Abhidharmadīpavibhāṣāprabhāvṛtti* (ADV). Vasubandhu introduces the *sarvāstivāda* and its grounds by the four masters and criticizes it in the fifth chapter of the AKBh. It is clear that the arguments in the TS and TSP presuppose those in the AKBh, and we can find many parallel and similar passages between the two texts. As Ejima [1986] rightly points out, we can assume that at least Kamalaśīla consults and uses the *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā* by Sthiramati (ca. 510–570). Through editing and translating the 21st chapter of the TS and TSP, I would also like to explore the relationships among texts such as the TS, TSP, commentaries on the AKBh, ADV, and *\*Nyāyānusāraśāstra* by Saṃghabhadra.

<キーワード> 三世実有論, 説一切有部, 経量部, ヴァスバンドゥ, *Abhidharmakośabhāṣya*, スティラマティ, 作用, サンガバドラ, シャーンタラクシタ, カマラシーラ